ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 35 号

弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地……濱田　延充…… 1

塩谷5号墳出土の人物埴輪……伊野　近富……12

高田山古墳群の発掘調査……小池　　寛……20

—平成元年度発掘調査略報—……26

12. 長　良　遺　跡　　16. 古殿遺跡第4次

13. 山　形　古　墓　　17. 宮津城跡第6次

14. 太田・下後古墳群　　18. 長岡京跡左京第226次

15. 阿婆田窯跡群　　19. 木津川河床遺跡

府下遺跡紹介　46. 宇治陵墓群……45

長岡京跡調査だより……48

センターの動向……51

受贈図書一覧……53

1990年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版　塩谷５号墳出土の人物埴輪

巫女形埴輪

弥生時代中期における
いわゆる生駒西麓産土器の製作地

濱　田　延　充

1. はじめに

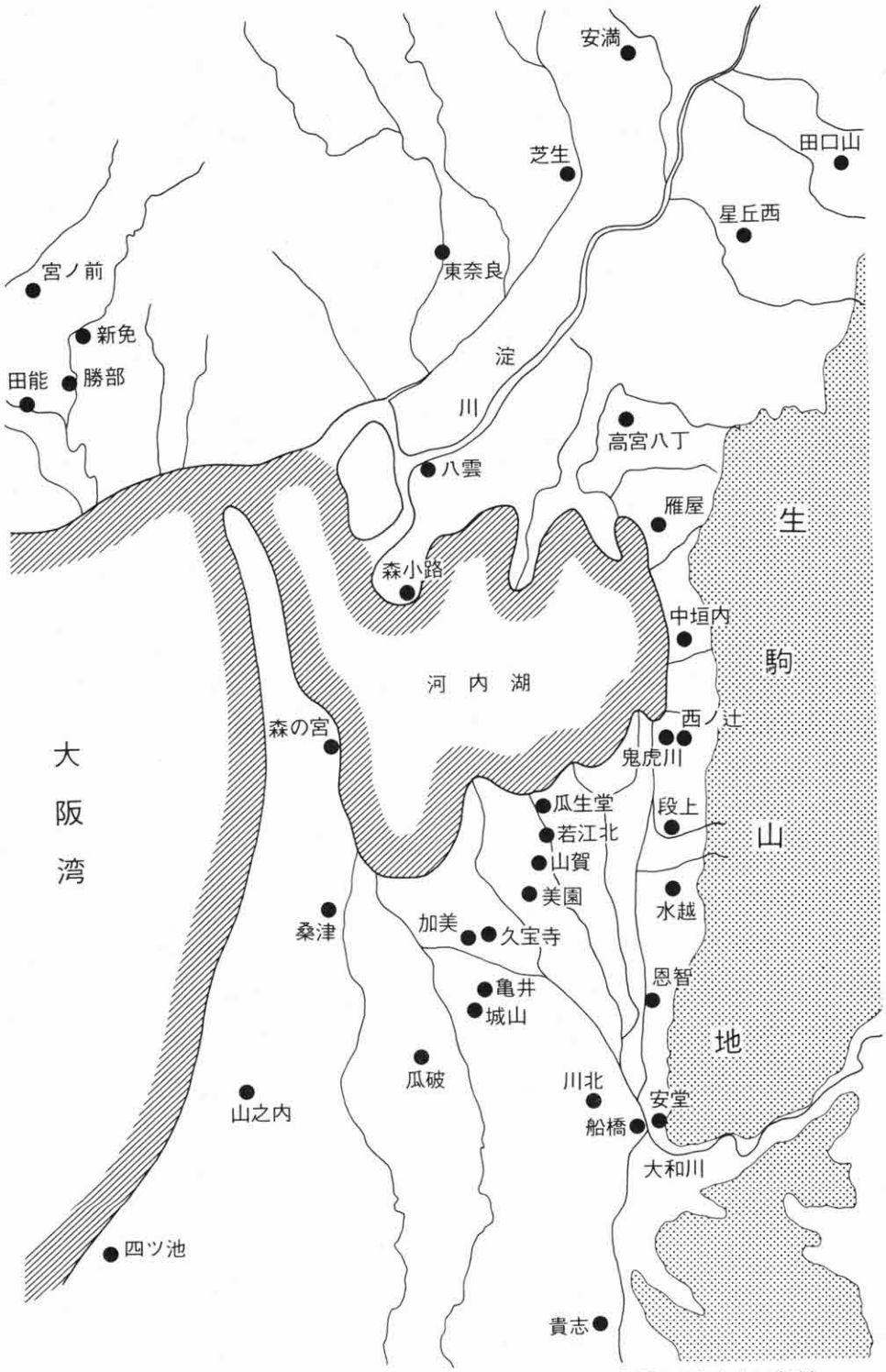
大阪府中河内地域を中心に出土する茶褐色系の色調を呈し，胎土中に角閃石を多量に含む土器がある。従来，「雲母土器」・「河内の土器」・「中河内産の土器」・「生駒西麓の土器」・「生駒西麓産土器」・「生駒山西麓産土器」などと呼ばれているものである。この特徴的な胎土をもつ土器は，小片であっても他の土器と容易に識別できる。こうしたことから，この土器が河内地域以外の遺跡でも出土していることが明らかになり，土器の移動，さらには地域間交流を考える上で，大きな役割をはたすこととなった。(注1)

現在まで，こうした胎土をもつ土器が縄文時代～鎌倉時代の長期にわたって存在することが明らかになっているが，(注2) 特に弥生時代中期中～後葉(畿内第Ⅲ・Ⅳ様式)のものについては胎土のみならず，形態・文様・調整においても極めて特徴的である。こうした事実は，佐原真氏をはじめ多くの研究者によって指摘されている。(注3) 三好孝一氏は器種別に諸特徴をまとめた上で，こうした土器を「生駒西麓型土器」と呼称した。

この特徴的な胎土については，単に肉眼による観察にとどまらず，多くの報告書において岩石学・物理学・化学等の自然科学の方法を用いた分析が行われている。菅原正明氏は各地で産出する粘土の焼成実験の結果から，この土器の製作に使用した粘土が「生駒山地と扇状地の傾斜変換点付近(標高130m)に露出する黄褐色粘質土」である可能性が大きいと結論づけた。(注4) また，奥田尚氏は胎土中に含まれる角閃石等の鉱物を混和材として考え，そうした鉱物が含まれている砂粒の産出地として八尾市恩智神社付近をあげられている。(注5)

一方，藤田憲司氏は土器製作における素地作りの問題から，粘土あるいは混和材の移動の可能性を指摘し，現状でのいわゆる「生駒西麓産土器」の製作地の比定に慎重な立場をとった。(注6)

このような状況下で，この土器がどこで製作されたかを明らかにすることは，弥生土器研究を進める上で極めて重要な問題である。さらにこの問題が土器研究にとどまらず，河内地域さらには畿内地域の弥生社会を考える上で重要な鍵をにぎるものと考えられる。上



第１図　本文関係遺跡位置図（『続大阪平野の発達史』梶山・市原1985をもとに作成）

記のとおり，この土器の製作地をめぐって研究者の間に若干の混乱があり，そのために微妙にニュアンスの異なるいくつかの名称が存在している。(注7) そこで，近年の資料の増加をふまえて，この土器の製作地の問題について若干の考察を加えたい。ただし，筆者は自然科学の知識に乏しく，多くの報告書に掲載されている胎土の科学分析の結果について正当に評価することはできない。そのため，もっぱら考古学的な方法を用いてアプローチを行う。このため，土器の形態・文様構成等の地域差が明らかになっている弥生時代中期中～後葉(畿内第Ⅲ・Ⅳ様式)に時期を限定する。

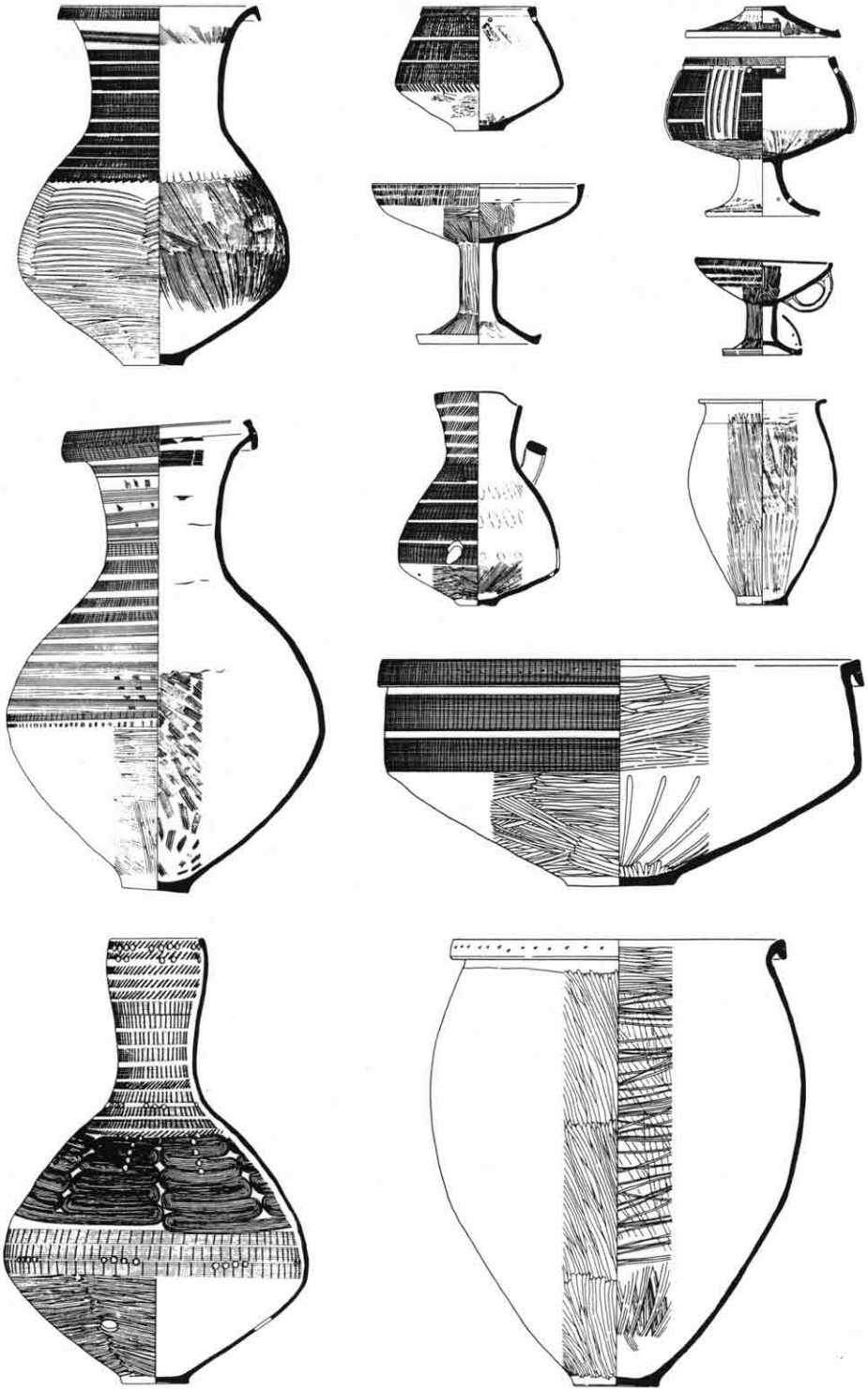
2. 各遺跡におけるいわゆる「生駒西麓産土器」の出土状況

これまでの研究で明らかなように，この土器は河内地域とりわけ中河内地域で多く出土している。そこで，この中河内地域をさらに生駒西麓部と平野部に区分する。これは，前述のように原材料の産出地との距離的な関係を示すと同時に，前者は生駒山地に源をもつ河川が形成した段丘あるいは沖積地に立地するのに対して，後者は旧大和川水系の河川が形成した沖積地に立地しており，両者は地質的にも大きく異なっているためである。

中河内平野部は，かつてこの土器の製作地と考えられた瓜生堂遺跡をはじめ数多くの遺跡が存在する。近年の大規模開発に伴う発掘調査によって大量の土器が出土しており，各遺跡の土器の様相も比較的明らかになっている。瓜生堂遺跡では5C地区で65%，4I地区で48%，近畿自動車道調査区B地区溝29で36.4%となり，調査区により数値のばらつきが認められる。(注8) 亀井遺跡では，近畿自動車道橋脚部の調査で37.5%，長吉ポンプ場の調査で約3割の数値が示されている。(注9) 山賀(注10)・久宝寺(注11)の両遺跡でも亀井遺跡と同じ様相になることが指摘されている。この土器の分布の中心と考えられていた当地域において，実際には5割を占める遺跡がほとんど無い。高い数値を示すのは，若江北遺跡(82.1%)ぐらいである。こうした状況下で，製作地を当地域に求めることは極めて困難といえよう。

一方，生駒西麓部では弥生時代中期に限ってみれば，これまで資料が断片的で様相が不明であった。(注13) しかし，この地域も近年の調査により徐々に明らかになりつつある。西ノ辻遺跡59-4区の自然河川弥生包含層Iでは80.3%の数値が報告されている。(注14) 同一自然河川を調査した隣接する調査区でも同じ様相を呈している。(注15) 恩智遺跡でも，この土器は約8割を占めると考えられる。(注16) また，南に位置する安堂遺跡溝3の資料では，79.9%の数値となっている。(注17)

こうした状況より，中河内地域において平野部よりむしろ生駒西麓部にこの土器の製作地を求めるべきである。これは，前述の菅原・奥田両氏の粘土あるいは混和材の産出地の推定とはからずも一致する。また，瓜生堂遺跡の粘土の焼成実験より，同遺跡産の粘土で



第２図　生駒西麓産土器（S＝1/8）

はいわゆる「生駒西麓産土器」の胎土とはならないという指摘[注18]とも合致する。

3. 中河内平野部で出土するいわゆる「生駒西麓産土器」の評価

前章でこの土器の出土する割合から，その製作地を生駒西麓部に求めた。それでは，中河内平野部で出土しているこの土器は搬入品となるのであろうか。あるいは，粘土・混和材の移動により，平野部においても製作がされていたのであろうか。ここでは，粘土等の移動を検証してみたい。

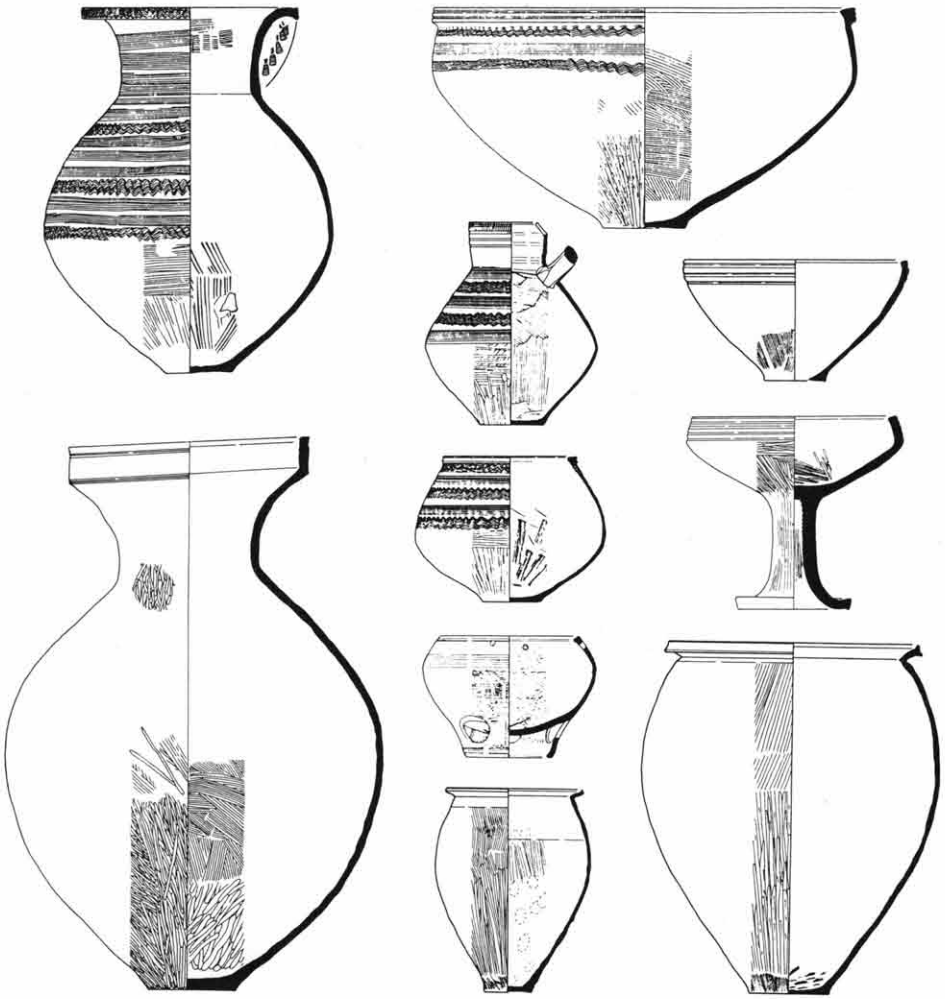
粘土の移動の証拠となるものとして，異種類の粘土を使用した土器が知られている。報告されているものの全てについて，片方の胎土は角閃石を多く含む，いわゆる「生駒西麓産土器」のものと同じである[注19]。山賀遺跡では前期の例[注20]が，また池上遺跡・船橋遺跡・恩智遺跡では後期の例[注21]が報告されている。もちろん，出土遺跡＝製作地とは断定できないため，どちらの粘土が移動しているかは不明である。さらに，運ばれた粘土の量的な問題についても明らかではない。

山賀遺跡の例について考えてみると，同遺跡の前期におけるいわゆる「生駒西麓産土器」の割合は，67.7%～74.9%であり，中期のそれと比べると異常に高い数値を示している。同遺跡では，焼成前の乾燥時にひびわれた箇所を角閃石を多く含む粘土で補修しているものもあり，同遺跡でこの粘土を用いた土器の製作が行われたと考えることもできる。

さて，ここで弥生時代中期に話をもどそう。これまでに当時期において，このような異種類の粘土を使用した土器は報告されていない。異種類の粘土を使用した土器を出土した上記の諸遺跡でも多量の中期の土器が出土しているにもかかわらず，この種の土器は1片たりとも見つかっていない[補注1]。こうした事実は必ずしも積極的に評価できないが，中期における粘土の移動の可能性は極めて少ないと考えたい。

さらに，この問題と大きな関わりをもつのが，近年，研究が進展している土器の地域性の問題である。佐原氏によって「極めて個性的である」[注22]と評された「河内の土器」は胎土の点からは角閃石を多く含むものである。この胎土をもつ土器が，形態・文様構成・調整技法等にきわめて高い斉一性をもつ事実は，すでに三好氏が指摘したとおりである[注23](第2図)。中河内平野部やその他の地域で出土するこの種の土器は，生駒西麓部で出土するものと型式差が認められない。

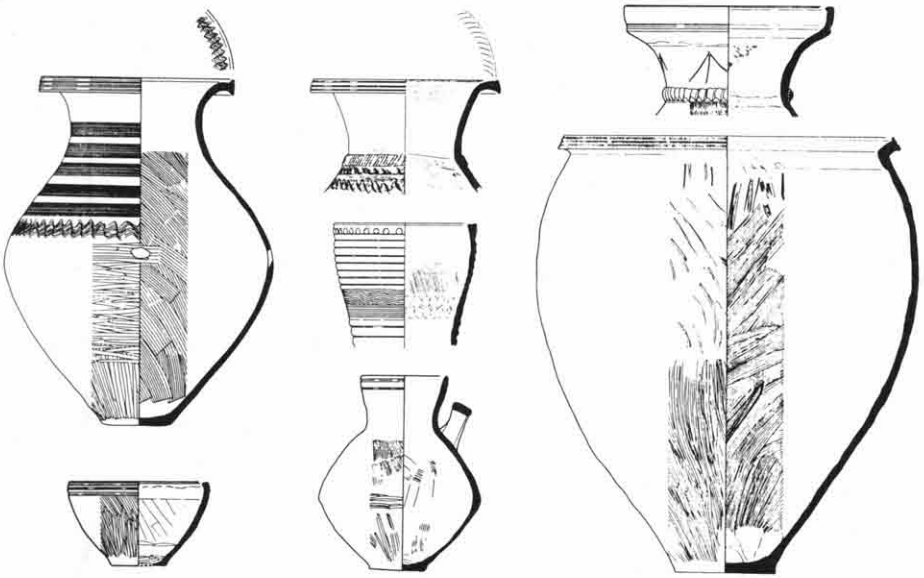
ここで，角閃石を多量に含む胎土をもつ土器を仮に「生駒西麓産土器」とすると，中河内平野部では「生駒西麓産土器」とそれ以外のもの(ここでは「非生駒西麓産土器」として一括してあつかう)[補注2]が共伴して出土している。生駒西麓産土器が簾状文を中心とした文様構成をもつのに対して，非生駒西麓産土器は波状文・凹線文を多用する[注24](第3図)。また，



第３図　非生駒西麓型土器（Ｓ＝1/8）

形態・調整技法についても両者の間には大きな違いがある。特に，両者の違いは，凹線文出現以降にいっそう明確になる。

平野部では，両者がそれぞれ壺・甕・鉢・高杯の器種のセット関係を有しており，両者が補完してひとつの様式を構成するものではない。つまり，平野部では二つの異なる様式が共存していることになる。もし，平野部で生駒西麓産土器が製作されていると仮定するならば，粘土の違いによって土器を作り分けていることになる。生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器の間で，使用時の用途の違いを想定することは，形態等から見るかぎり困難である。むしろ，平野部の生駒西麓産土器は製品として搬入されたものと理解する方がはるかに合理的であろう。

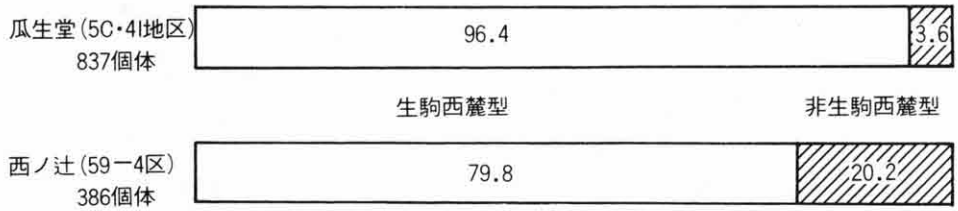


第4図　非生駒西麓型の生駒西麓産土器（S＝1/8）

ところで，生駒西麓産土器とするものの中には，非生駒西麓産土器に見られるものと同型式の土器がある(第4図)。こうした土器が生駒西麓産土器全体の中で量的に占める割合はわずかであるが，これを生駒西麓部以外で製作されたものとして，粘土の移動の証拠とする考えがある。(注25) しかし，摂津・和泉・大和・山城等の中河内平野部以外の地域では，こうした土器は認められず，生駒西麓産土器は簾状文を多用する生駒西麓型である。一方，生駒西麓部に属すると考えられる西ノ辻・恩智両遺跡でこうした土器が出土している。西ノ辻遺跡と平野部の瓜生堂遺跡における生駒西麓産土器における非生駒西麓型土器の割合(第5図)を比較すると瓜生堂遺跡のほうが低くなる。以上のことから上記の考えについては賛同できず，こうした土器も生駒西麓部で製作されたものと理解したい。

4.　生駒西麓地域の範囲

さて，これまで中河内地域を平野部と生駒西麓部に分けて土器の様相を概観してきたが，生駒西麓産土器の製作地としての生駒西麓地域とは具体的にどれくらいの範囲を示すことになるのであろうか。言葉の示すとおり生駒山あるいは生駒山地の西側に位置する現在の行政区域での東大阪・八尾両市域を中心とする地域であることは研究者間の共通のイメージとしてある。小論ではこの中から瓜生堂・亀井遺跡等の含まれる平野部を除外した。三好孝一氏は，八尾市恩智・東大阪市鬼虎川の両遺跡を中心とした地域を想定している。(注26) そこで，ここでは各遺跡の出土土器を見ながら，もう少し厳密に地域設定を行ってみたい。

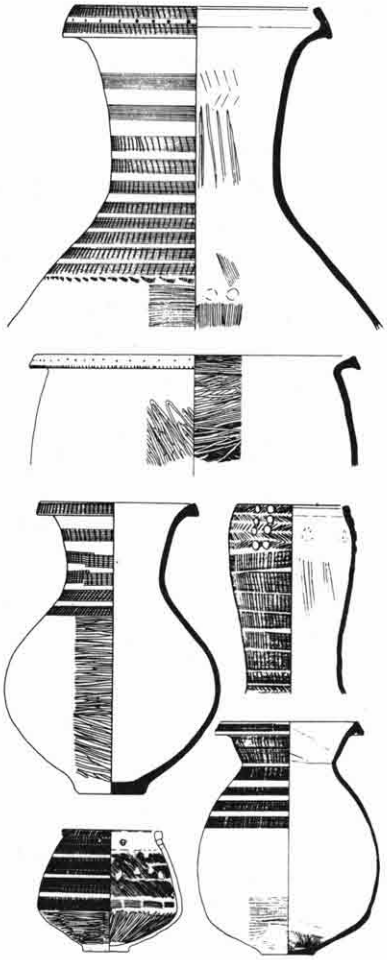


第５図　生駒西麓産土器に占める非生駒西麓型土器の割合

その際に各遺跡が生駒西麓地域に含まれる指標の一つとして，出土土器に占める生駒西麓産土器の比率が80％近くになることをあげておきたい。

まず，生駒西麓地域の北の境界であるが，四条畷市雁屋遺跡については，三好氏が「西麓型土器の強い影響のもとに製作された土器をもつ」遺跡としている。実際に雁屋遺跡では簾状文を駆使して形態的にも生駒西麓産土器によく似ているが，胎土は生駒西麓産土器と異なる土器が出土している。(注27) こうした土器が出土する遺跡については，生駒西麓地域の周辺に位置するものと考えたい。以上のことから，雁屋遺跡については生駒西麓地域に含まれないと考え，ここから北側の北河内地域についても同様に考える。

雁屋遺跡より南側については，生駒西麓産土器の製作地と考える西ノ辻遺跡との中間に大東市中垣内遺跡があるが，同遺跡の中期土器の様相について明らかになっているとは言いがたく，(注28) 今後の調査の進展が期待される。



第６図　生駒西麓型の非生駒西麓産土器
（S＝1/8）

次に南側の境界については，前述のとおり条件付きで柏原市安堂遺跡を含めることができる。隣接する船橋遺跡は生駒西麓産土器の研究史の上で重要な遺跡であるが，資料的に問題があり，(注29) 生駒西麓地域に含めることは現段階では保留しておく。船橋遺跡北側の藤井寺市川北遺跡では，雁屋遺跡と同様に生駒西麓型の非生駒西麓産土器が出土している。(注30) この土器を在地の土器と理解すれば，雁屋遺跡同様に川北遺

跡は生駒西麓地域の周辺部と評価される。大和川より南の羽曳野丘陵の藤井寺市国府遺跡や石川流域の遺跡(富田林市喜志・中野遺跡等)は，従来言われているように生駒西麓地域からは区別される。(注31)

最後に問題となるのが，中河内平野部との境界をどこに設定するかである。現状では，瓜生堂等の平野部の遺跡と生駒西麓部の遺跡の間に存在すると考えられる遺跡の実態が不明である。こうした状況下では推測の域をでないが，生駒西麓地域は恩智川以西には大きく広がらないと思われる。

以上のことから，東大阪市～柏原市の生駒山地の西麓に生駒西麓地域を設定することができる。この地域に含まれる弥生時代中期の遺跡には，東大阪市植付・西ノ辻・鬼虎川・鬼塚・山畑・段上，八尾市水越・恩智，柏原市安堂の各遺跡がある。こうした遺跡(集落)で生駒西麓産土器が製作されたと考えられる。

5. おわりに

小論では，角閃石を胎土に多く含むチョコレート色を呈する土器について，弥生時代中期中葉～後葉に時期を限定すれば，生駒西麓地域という河内の中でもかなり限定された地域で製作されたものであることを明らかにした。この土器の名称についてはいくつかあることを最初に述べたが，今後，この時期に限って「生駒西麓産土器」を専ら使用することとしたい。また，弥生中期土器の地域的(空間的)様式論の観点からは，中河内地域をさらに平野部と生駒西麓地域に分けることができる。

上記の結論より，中河内地域平野部の各遺跡で出土している生駒西麓産土器は全て搬入品と理解され，これ以外の土器の中で在地や製作されたものを求めなければならない。そして，土器編年等を考える場合もこうした地域性をたえず考慮する必要がある。(注32)

中河内地域平野部の各遺跡(集落)に多量の生駒西麓産土器が運び込まれている事実は，単に距離的な問題だけではなく，生駒西麓産土器の性格あるいは弥生社会における土器の生産・流通の問題として考えるべきであろう。(注33) 弥生時代前期・後期，あるいは他の時代におけるこうした胎土をもつ土器の評価，生駒西麓地域の中でさらに小地域差が存在するのか等，残された課題は多い。今後，こうした問題をひとつずつ明らかにしていくことにより畿内弥生社会の構造が解明されるものと考える。(注34)

(はまだ・のぶみつ＝大阪府寝屋川市教育委員会技術職員)

注1　特に重要な研究として次の論文がある。
(a)佐原　真「大和川と淀川」(『古代の日本』5近畿) 1970
(b)都出比呂志「古墳前夜の集団関係」(『考古学研究』20-4) 1974

(c)秋山浩三「河内からもちはこばれた土器」(『長岡京古文化論叢』) 1986

注２　東大阪市郷土博物館『もちはこばれた河内の土器』1980

注３　(a)佐原　真　注１(a)文献

(b)森井貞雄「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」(『大阪文化誌』15) 1982

(c)井藤暁子「入門講座　弥生土器　近畿」４(『考古学ジャーナル』207) 1982

(d)三好孝一「生駒西麓型土器についての一視点」(『花園史学』８) 1987

注４　菅原正明「生駒西麓の土器」(『東山遺跡』大阪府教育委員会) 1980

注５　第５回庄内式土器研究会における奥田氏の発表による。

注６　藤田憲司「『搬入土器』研究の課題」(『大阪文化誌』17) 1984

清水芳裕氏も「生駒西麓産土器」の胎土の認識等の点から同様な立場をとっている。

清水芳裕「土器の動き」(『弥生文化の研究』７弥生集落) 1986

注７　こうしたことから，土器の製作地等の問題とは別に，こうした胎土をもつ土器をとりあえず「生駒西麓産土器」と呼称する考えがある。

宮崎泰史編『亀井遺跡Ⅱ』㈶大阪文化財センター　1984

注８　(a)瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅲ』1981

(b)㈶大阪文化財センター『瓜生堂』1980

注９　(a)㈶大阪文化財センター『亀井(その２)』1986

(b)㈶大阪文化財センター『亀井・城山』1980

注10　㈶大阪文化財センター『山賀(その３)』1984

注11　三好孝一氏の御教示による。

㈶大阪文化財センター『久宝寺南(その１)』1987

注12　㈶大阪文化財センター『若江北』1984

注13　前期・後期については，下記の研究に各遺跡の割合が提示されている。

(a)下村晴文「もちはこばれた河内の土器」(『第３回大阪府下埋蔵文化財担当者研究会資料』) 1980

(b)秋山浩三　注１(c)文献

注14　大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅳ』(本文編) 1987

注15　大阪府教育委員会が1984～1985年に発掘調査を実施。

注16　瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ(本文編) 1980

注17　柏原市教育委員会『安堂遺跡』1987

ただし，溝３資料は時期的に限定される資料のため，慎重な取り扱いが必要とされる。同資料については，竹下賢・桑野一幸両氏の御好意により実見することができた。

注18　上西美佐子・藤沢真依・岩崎二郎「弥生時代中期遺構面Ⅰ(溝29)出土遺物についての小考」(『瓜生堂』㈶大阪文化財センター) 1980

注19　これは，前述のとおり「生駒西麓産」と呼ばれる胎土の識別が容易であるのに対して，他の胎土については現状では識別が困難であることによる。

注20　注10文献

注21　㈶大阪文化財センター『池上遺跡』第２分冊(土器編) 1979

㈶大阪文化財センター『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書』1976

注22　田辺昭三・佐原　真「弥生文化の発展と地域性　近畿」(『日本の考古学』Ⅲ弥生時代) 1966

注23　三好孝一　注３(d)文献

また，森井貞雄氏も同様に考え，こうした諸特徴をもつ土器を「瓜生堂式」としている。

森井貞雄　注３(b)文献

注24　簾状文と凹線文が施文技法的に異なることについては，森岡秀人氏の指摘がある。

森岡秀人「西ノ辻N式併行土器群の動態」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』) 1982

注25　井藤暁子「土器の一視点から見た弥生時代中・後期の巨摩廃寺遺跡」(『巨摩・瓜生堂』㈶大阪文化財センター) 1982

注26　三好孝一　注3(d)文献

井藤暁子氏も同様な地域を想定している。

井藤暁子「畿内の櫛描紋土器」(『弥生文化の研究』4弥生土器Ⅱ) 1987

注27　四条畷市教育委員会『雁屋遺跡』1987

大阪府教育委員会『雁屋遺跡発掘調査概要』1987

注28　近年，大東市教育委員会によって断続的に発掘調査が行われているが，中期のまとまった資料は検出されていないようである。以前に採集された遺物については，一部が図化，公表されている。

三好孝一「河内潟東辺部における弥生時代集落」(『考古学論集』Ⅱ) 1988

注29　船橋遺跡出土土器は完形品が多く，一部焼成後の穿孔が認められることから(大阪府立泉北考古資料館特別展示「船橋遺跡出土優品展」の展示土器で実見)，方形周溝墓の供献土器の可能性がある。中河内平野部において方形周溝墓の供献土器に占める生駒西麓産土器の割合は集落出土土器より高くなる傾向にあることが，瓜生堂・加美・城山の各遺跡の資料より明らかになっている。

大阪市教育委員会・㈶大阪市文化財協会『加美遺跡現地説明会資料』1985

㈶大阪文化財センター『城山(その1)』1986

加美遺跡資料については田中清美氏，城山遺跡については杉本二郎氏の御好意で実見することができた。

瓜生堂遺跡については注8文献参照

注30　大阪府教育委員会『川北遺跡発掘調査概要』1981

注31　佐原　真「河内の土器」(『東山遺跡』大阪府教育委員会) 1980

三好孝一　注3(d)文献

注32　先駆的研究が，中河内平野部の弥生集落の発掘調査報告書において行われている。

畑　暢子「いわゆる亀井産土器の検討」(『亀井・城山』㈶大阪文化財センター) 1980

注33　広瀬和雄氏は，中河内平野部の生駒西麓産土器のあり方について「恒常的供給体制」を考えている。

広瀬和雄「弥生土器の編年と二，三の問題」(『亀井(その2)』㈶大阪文化財センター) 1986

注34　小論は1986年1月に大阪市立大学文学部に提出した卒業論文の一節を骨子として，その後の新資料をふまえて書き改めたものである。小論をなすにあたっては，卒業論文を御指導いただいた栄原永遠男先生をはじめ，秋山浩三，梶木尚美，桑野一幸，杉本二郎，竹下賢，田中清美，西口陽一，福永信雄，宮崎泰史，三好孝一，森井貞雄，森田克行，安村俊史の諸氏をはじめ多くの方々から資料の提供，有益な御教示を賜った。深くお礼申し上げます。

補注1　西ノ辻遺跡第7次調査で出土した鉢にこうしたものがあることが明らかになった。報告書写真より，形態的には生駒西麓産土器に通有なもの(生駒西麓型)と考えられる。出土遺跡が生駒西麓地域に含まれること等，様々な問題を含んでいるが，これについては改めて検討を加えたい。

㈶東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡』1988

補注2　芋本隆裕氏は，生駒西麓産土器以外のものについても，「石英・長石を多量に含む灰白色の非河内産」と「石英・長石を多数含むとともに少数ながら角閃石・雲母を含むもの(非生駒西麓産)」に分類している。

芋本隆裕「瓜生堂遺跡発掘調査概報」(『㈶東大阪文化財協会概報集』1988年度) 1989

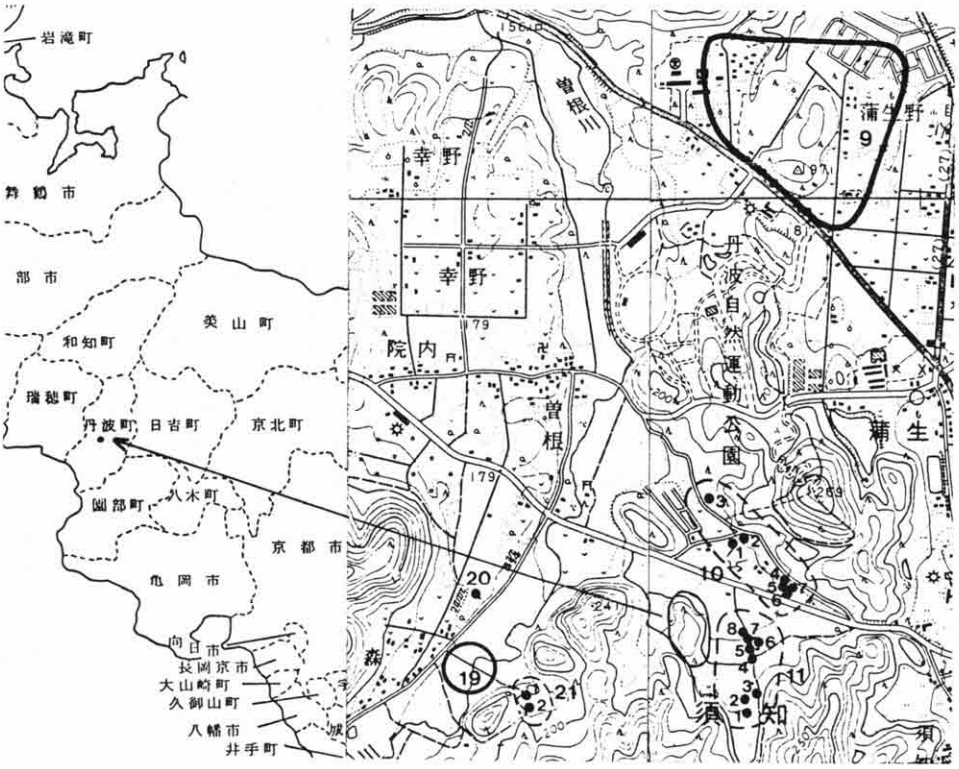
塩谷５号墳出土の人物埴輪

伊　野　近　富

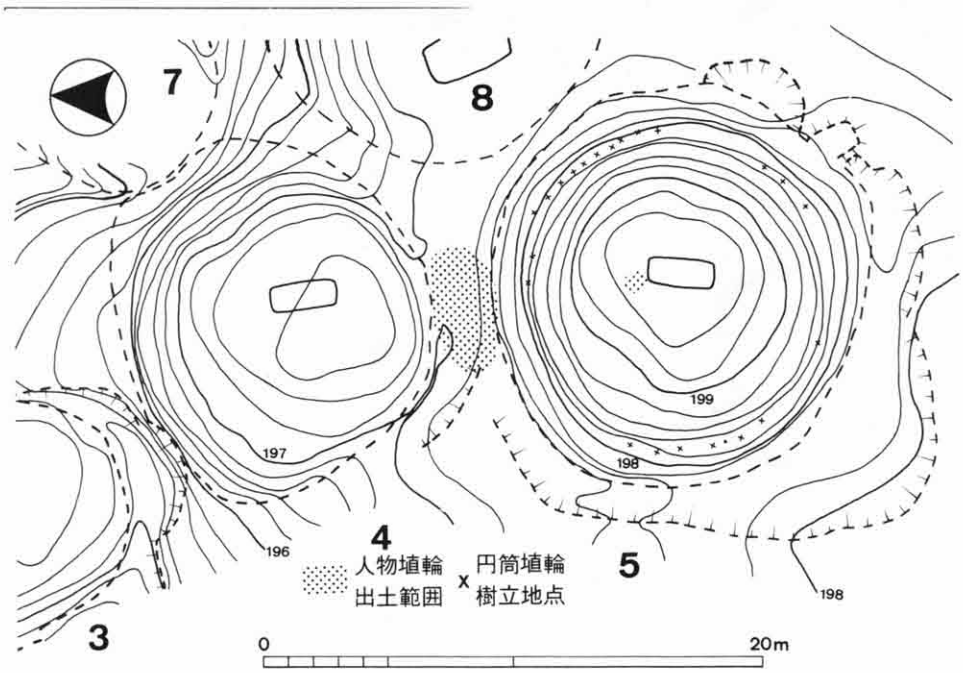
1.　はじめに

今回報告する塩谷古墳群は，丹波高原の一画を占める丹波町曽根にある。この辺りは高原に点在する小丘陵が集まって，東西方向の細長い谷地形となっており，その谷に向かって南からのびた小丘陵上に立地している。大小12基の古墳によって構成されており，平成元年５月～９月にかけて，京都府園部地方振興局の依頼を受けて，当調査研究センターと京都府教育委員会が発掘調査を実施した。その際に，５号墳から丹波町内初の埴輪が出土し，更に人物埴輪も２体含まれていることが判明した。

そこで，丹波地域の古墳文化を考える上で重要であるので，ここで人物埴輪に焦点を当



第１図　調査地位置図



第2図　埴輪出土地点

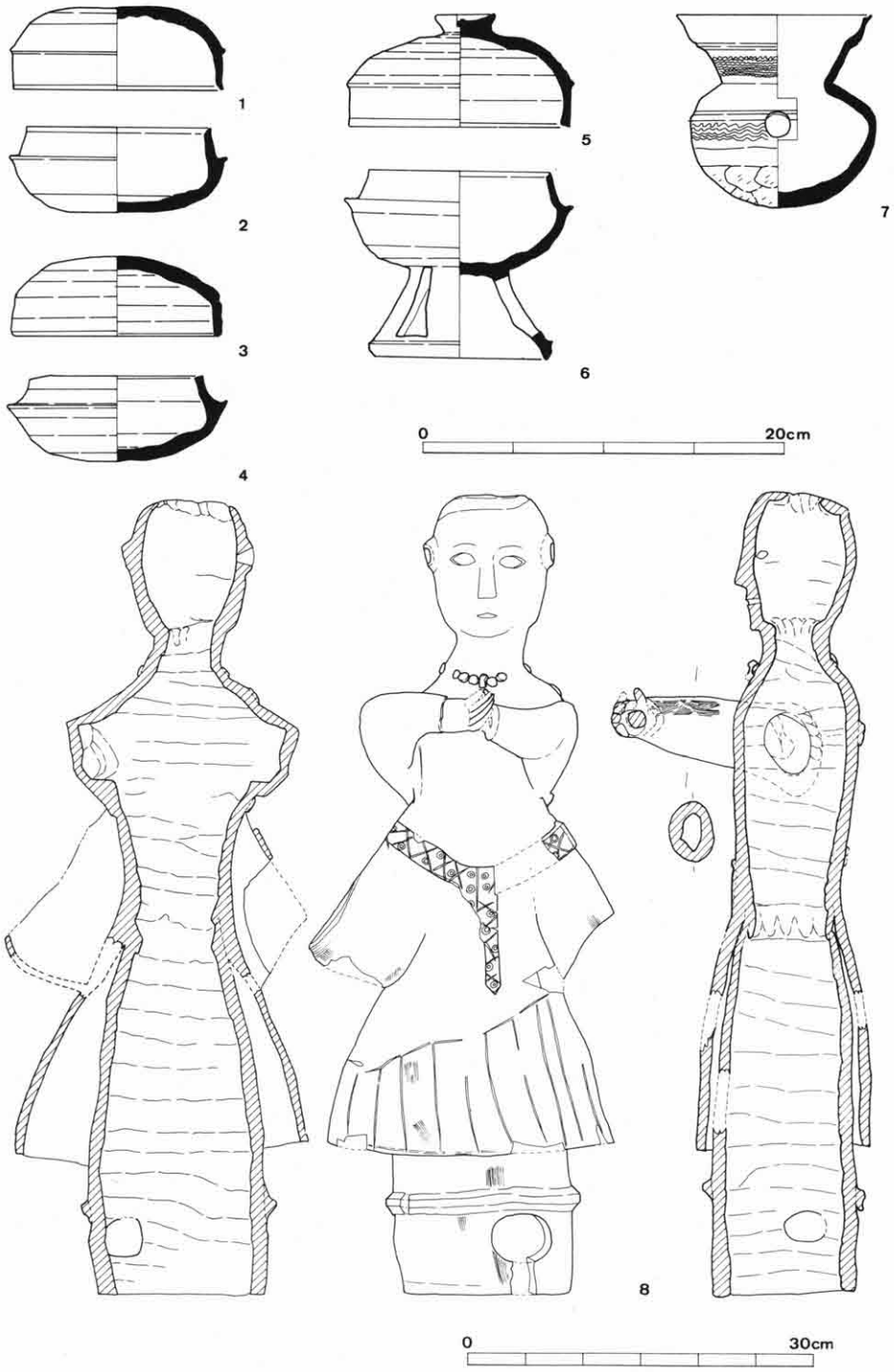
てて報告したい。

2.　5号墳の概要(注1)

古墳群は，尾根筋にあるものが6基，東斜面にあるものが6基である。5号墳は，尾根筋に連結して築かれた5基の古墳の中でもっとも高い地点にあり，唯一埴輪をもち，当古墳群築造の端緒となったものである。木棺直葬の円墳で，直径約15.5mあり，高さは約2mである。南端の周濠部は途切れ，テラス状の壇がある。墳丘裾から約80cm上がったところに，円筒埴輪(直径約20cm)が樹立されていた。現状は底部から第1段目のタガ部分まで遺存しており，22か所で検出された。北東部では約65cm間隔で，他は1～1.2m間隔である。これをもとに想定すると，かつては35～40本ほど樹立されたらしい。

さて，人物埴輪は他の円筒埴輪とともに，5号墳の北部周濠(あるいはテラス)部分で5～10cm大の破片の状態で検出された。今回図示できたものが東側に多く，図示できなかった破片数の少ないものが西側に集中していた(第2図)。なお3片ではあるが，墳頂部北部で検出したので，かつてはそこに樹立していたと推測できる。

墳頂部には大きな盗掘坑があり，主体部のほとんどは遺存していなかったが，かろうじて，南北方向の掘形が判明した。長さ約4.2m・幅約2mである。そこで，須恵器2点(第



第３図　出土遺物実測図
塩谷５号墳：1・3. 須恵器杯蓋　2・4. 須恵器杯身　5. 須恵器蓋
6. 須恵器高杯　7. 須恵器甕　8. 人物埴輪

３図３・４），鉄鏃１点を検出した。これらの遺物と，周濠内で出土した他の須恵器は，大阪府陶邑古窯跡群のTK47[注2]と同様と思われる。また，円筒埴輪は軟質であるが，川西宏幸氏編年[注3]のＶ期の特徴を有している。なお，人物埴輪は硬質に焼き上がったか所もあり，窖窯で焼成されたと思われる。

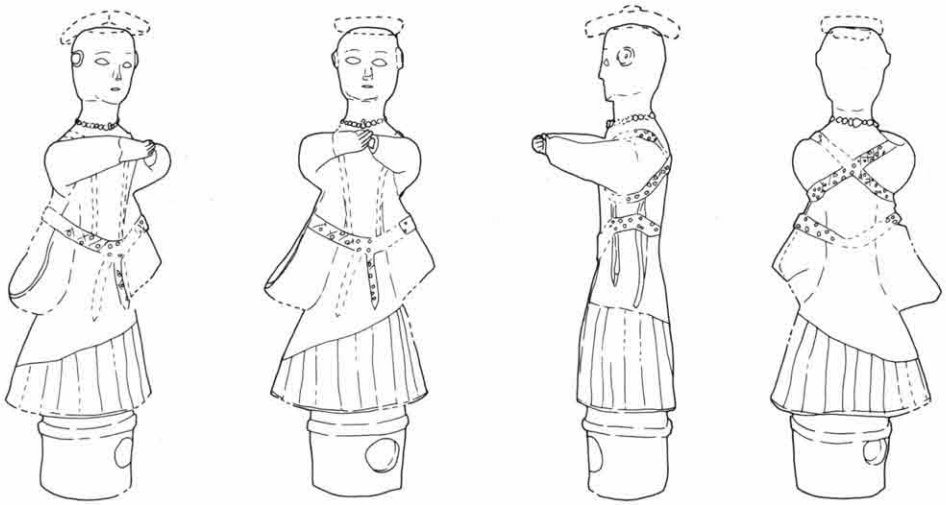
3. 人物埴輪について

人物埴輪は２個体出土した。その内，図示した方の高さは71.3cmである。但し，頭髪部分は調査地内では検出されなかった。それを含めると74～75cm程度であったのだろう。頭頂は，外側から粘土紐の端を押し入れており，意図的に穴を開けた状態である。耳や鼻は立体的に造形されており，目と口はヘラ様の鋭利なもので切り込みを入れ，一気に開けたものである。首飾りは正面中央に１個勾玉を粘土塊で表現し(下部欠損)，その周りに現存11個の丸玉を表現した粘土塊を貼付している。両腕は前方にまわし，何かを差し出しているようすである。残念ながら，手の部分は破損しており，左手は親指のみ，右手は指３本(親指・中指・薬指)のみ遺存していた。なお，図示できなかった方は手の部分が遺存しており，杯様を手のひらに載せていたが，当例の場合は，手と手を合わせたようなポーズになっており，杯を載せるスペースのないことから，何か細長いものを縦方向に差していたようである。きぬがさでも持っていたのであろうか。

衣服については，ヘラで縦方向に刻んで表現した裳(スカート)をはき，腕の部分は筒袖を表現している。その上から，左から右へ斜めに羽織った状態を表現している。これは襲(意須比・おすい)と呼ばれているものである。更に，その上にはたすきを掛けている。たすきには斜線をヘラで描き，斜線の間に竹管文のような円形の押印をしている。これは丸玉でも縫い込んだ状態を表現しているのであろうか。なお，前述した襲の袖口は左を綴じ込んでおり，右は開けている。

足は表現せず，円筒埴輪の下段部分と同様のものを使用している。タテハケが確認できる。一段目のタガまでに２か所の円形透し穴がある。

成形について概述すると，以下のようである。２～３cm幅の粘土紐を輪積みし，腰から上は左上がりの巻き上げで首まで作っている。それに頭部を連結させている。頭部も同様に２cm幅程度の粘土紐を輪積みしているらしいが，ていねいなナデによってその跡は消されている。スカートの部分は本体を巻いて接合させており，接合部は強度を増すためか，上半部を下半部に差し込むようにしていて，そこにスカートの上端を重ねている。腕も粘土紐を輪積みしたものを，つけ根で接合させているが，ほとんどが中空である。但し，手の部分だけは中実で，指一本ずつを丹念に付けている。たすきは平らな粘土紐を貼付し



第４図　人物埴輪スケッチ

ている。なお，本体は粘土紐の状態から大きく６ブロックに分割して接合している。つまり，下から14cmぐらいまで(スカートの下端辺り)，同27cmぐらいまで，同32cmぐらいまで（腰の辺り），同52cmぐらいまで(腕のつけ根上端辺り)，同60cmぐらいまで(首の辺り)，頭部である。腕は別々に作ったものを，つけ根で接合している。腕のつけ根と腰と首の部分はユビオサエで慎重に接合しており，成形は３段階と大きく考えることも可能である。

胎土は１～２mm大の白色砂(石英か)と褐色のチャート片を含んでおり，近隣の胎土の可能性がある。色調は，下半が灰褐色で上半が淡褐色である。もう１体も同様だが色調は淡褐色である。なお，かろうじて遺存した襲は若干大きいので，やや大型品か。

4.　人物埴輪出土の意義

丹波町で出土したこの埴輪は，いったいどのような歴史的意義を有しているのだろう。発掘調査によって，塩谷古墳群は５世紀末～６世紀初の５号墳を端緒として６世紀中葉まで連続して築造されたことが判明した。500m以内の近隣の古墳群である宮の浦古墳群７基は，片袖式の横穴式石室墳である１号墳を端緒とし形成され，深志野古墳群８基も横穴式石室墳であることから，結局，曽根の地にある約30基の古墳群は，塩谷５号墳築造を契機として形成されたことになる。

古墳群の北0.6kmのところには，現在何鹿(いつしか)神社がある。これは『延喜式』にある「出石鹿岾部神社(注４)」であり，往時と同地であったかは別として，この辺りが有力地であったことは首肯できよう(船井郡内の式内社は10か所)。また，平城京で出土した木簡(８世紀前半

の遺構から)の中に「丹波国船井郡曽尼里秦人吾□米」というのがある。これによって，現在の曽根は当時「曽尼里」とよばれていたことと，秦人が居住していたことがわかる。秦人とは，加藤謙吉氏[注5]によれば，各地の首長の支配下にあった渡来人グループである。彼らは6世紀前半頃にヤマト政権の財務担当(トモノミヤツコ)に就任した秦氏によって，支配下に組織され，その「在地型殖産的性格」の一翼を担ったと思われる。すなわち，養蚕や土木技術などの殖産的新技術である。この曽根の地を開発した小豪族は，(奈良時代以前から居住したとの前提ではあるが)，秦人の新技術によって勢力を増し，古墳を築造した。その際，盟主墳の証として埴輪を樹立し，墳頂には人物埴輪—その形態・襲を羽織っているので巫女であろう—を樹立したのである。それが，開発豪族としての証の意味が大きいことは，他の近隣古墳に樹立されなかった点からも首肯できよう。

「巫女形埴輪」が，古墳祭祀に重要だったことは，若松良一氏[注6]の研究によって明らかである。氏によれば，人物埴輪は5世紀中葉に出現するが，まず女子像であり，同後半には大阪府蕃上山古墳(全長53mの帆立貝式)では，襲を右肩から左脇にかけた巫女形埴輪や武人像(いずれも半身像)が出現し，6世紀前後に写実的なもの(腕は中空・ほぼ全身像)となり，6世紀中葉にはデフォルメされたもの(腕は中実・ほぼ全身像)となり，同後半の約半世紀関東方面で爆発的に樹立される。像の種類は増すものの，一種類しか樹立しない場合は基本的に巫女形埴輪であり，いかに古墳祭祀を執行する上で重要だったかわかる。

なお，塩谷の巫女形埴輪は，通例の逆に襲を羽織っており，注目に価する。

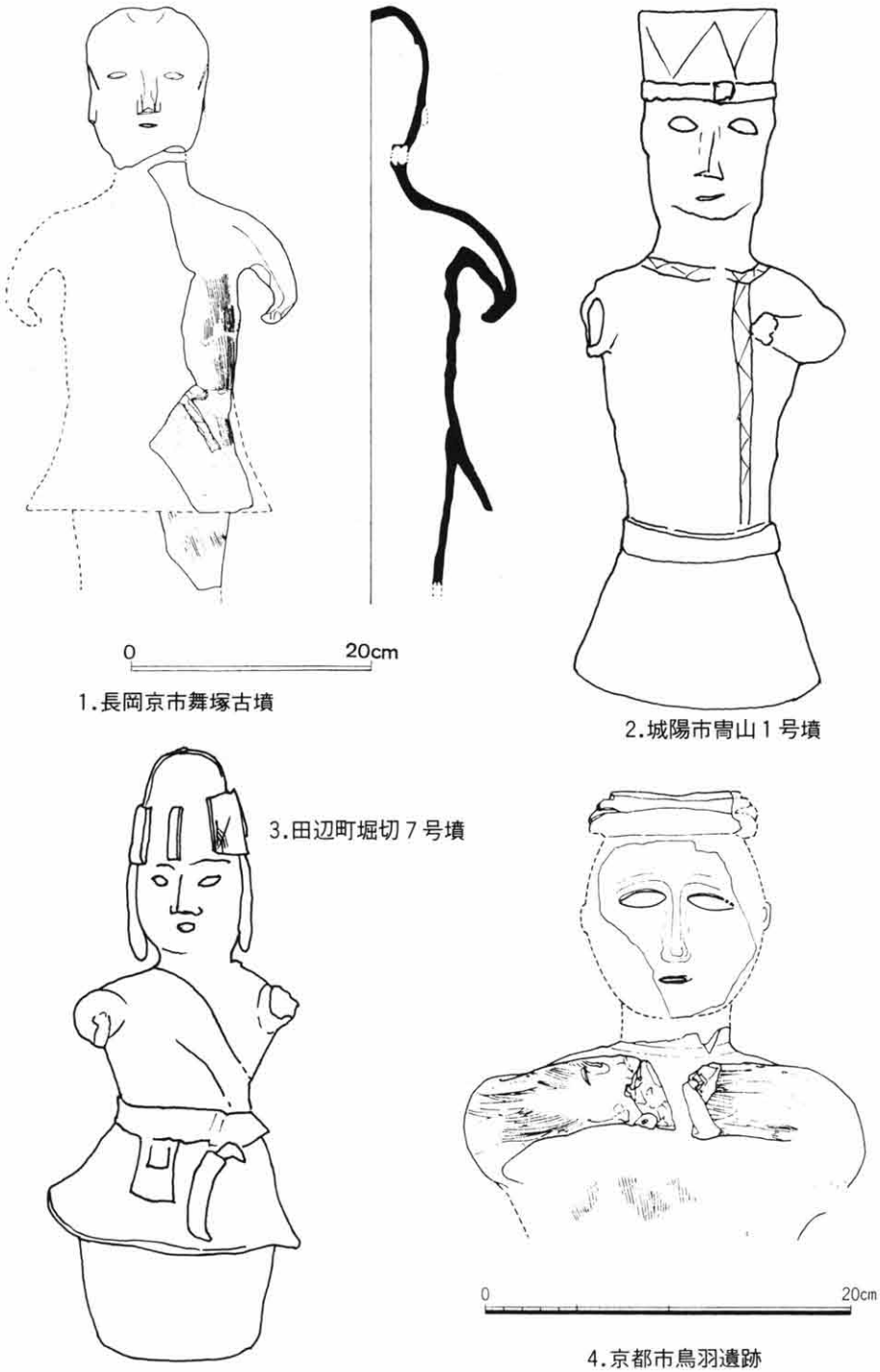
5. 京都府内出土の人物埴輪

現在確認されている京都の人物埴輪は，遺跡地図等によれば14か所20個体以上である。その中で巫女形埴輪と断定できるのは鳥羽遺跡のみである。表1を見て気づくのは，墳形のわかる11か所の内前方後円墳が6か所と多く，円墳でも本例のように南に土壇があったり赤塚古墳のように造り出しがあったりして単純な墳形ではなく，方墳もない。

さて，本例のように古墳群形成の契機となったものは『丹波の古墳Ⅰ』[注7]や『南山城の前方後円墳』[注8]『南山城の古墳』[注9]の編年観によれば，稲葉山10号墳・坊主山1号墳・胄山1号墳・赤塚古墳・北大塚古墳・堀切7号墳などで，内容の明らかな古墳群のほとんどである。

前項で推測したように，ヤマト政権と密接な関係をもち始めた地方中・小豪族の，開発豪族としての証が人物埴輪樹立という行為であるとするなら，逆にヤマト政権側からすれば，地方の要地に抬頭した豪族を支配下におく手段たりえたであろう。

つまり，人物埴輪樹立は，ヤマト政権が各地の地域支配権継承の儀式である古墳祭祀に際して具現させたもので，ヤマト政権による地方支配の1つのインパクトだったのである。



第５図　京都府内の人物埴輪のいくつか（2・3は写真からトレース）
1. センター概報第９冊　2.「よみがえる古墳文化1986」
3.「田辺町概報1982」　4.「平安京発掘資料選二」

表１　人物埴輪出土地名表（京都府遺跡地図による）

古　墳　名		墳　形	全　長	時　期	人　物　埴　輪
福知山市	稲葉山10号墳	前方後円墳	38m	古墳時代後期前半	巫女・弾琴像・武人・鷹匠
綾部市	以久田野17号墳？	円　墳	22m	〃	
綾部市	上杉１号墳			？	頭部片
丹波町	塩谷５号墳	円　墳	15.5m	〃　中期末	巫女形２
京都市	穀塚？	前方後円墳	40.5m	〃　中期	腕片？
京都市	鳥羽遺跡			？	巫女形１
長岡京市	今里舞塚	前方後円墳	39m	〃　後期	女性１
宇治市	二子塚古墳	前方後円墳	105m	〃　後期初	
宇治市	坊主山１号墳	前方後円墳	45m	〃　後期前半	
城陽市	冑山１号墳	前方後円墳	25m	〃　後期初	男性
城陽市	赤塚古墳	円墳(造出付)		〃　中期末	武人
井手町	北大塚古墳	円　墳		〃　後期前半	頭部片
田辺町	堀切７号墳	円　墳	15m	〃	武人１，女性２
和束町	大杉古墳			？	

6. おわりに

塩谷５号墳で出土した人物埴輪を中心に少し考えてみたが，これは一私見であり大方の批判を受けるべき内容である。なお，事実関係については概報を刊行するので参照していただきたい。

（いの・ちかとみ＝当センター調査第２課調査第２係主任調査員）

注１　現説資料『丹波町塩谷古墳群』京都府教育委員会・㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

注２　田辺昭三他『陶邑古窯址群１』平安学園考古学クラブ　1966

注３　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2・4）1977・1978

注４　『何鹿神社御由緒記』何鹿神社総代会編　1987

注５　加藤謙吉「渡来人」『古代史研究の最前線』第一巻政治・経済編　1986

注６　若松良一「人物埴輪編年試論」(『討論　群馬・埼玉の埴輪』あさを社）1987

注７　『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会　1983

注８　『南山城の前方後円墳』龍谷大学文学部考古学資料室　1972

注９　和田晴吾「南山城の古墳」(『京都地域研究』Vol. 4）1988

付記　本稿は丹波町在住の岩崎薫・浅井義久両氏はじめ，岡本美和子氏らのご協力によるところが多い。

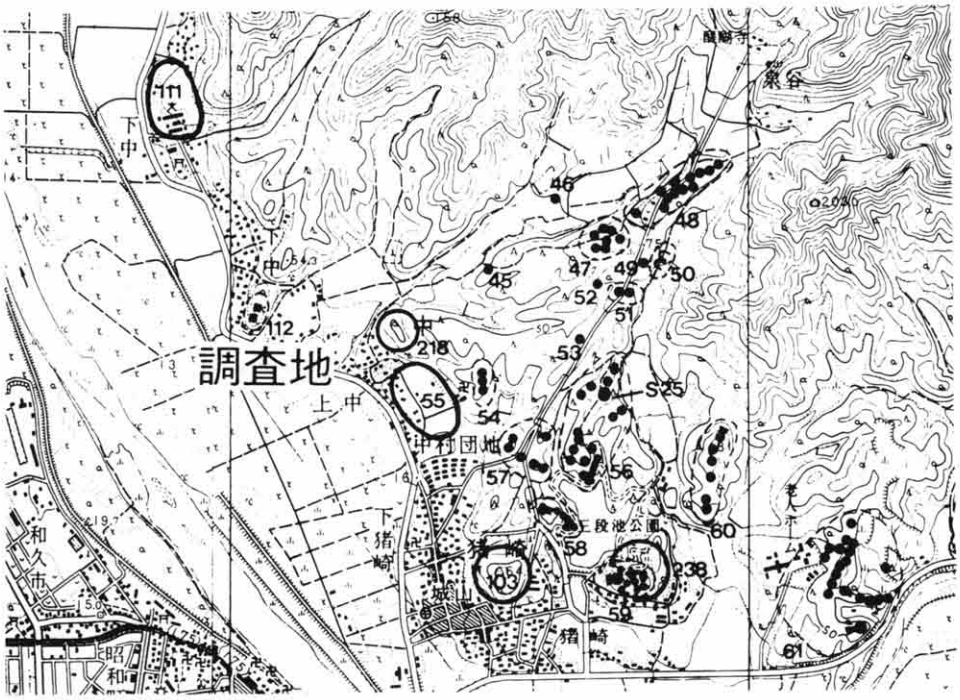
高田山古墳群の発掘調査

小　池　　寛

1. はじめに

高田山古墳群の発掘調査は，京都府中丹土地改良事務所が計画している府営広域農道建設に伴う事前調査で，同所の依頼を受けて実施した。

高田山古墳群は，京都府福知山市庵我字中に所在する(第1図)。本古墳群が所在する丘陵は，由良川の東岸に位置しており，この丘陵から福知山市内周辺を広く見渡すことができ，古墳を築造する条件は良好である。



第1図　調査地位置図および周辺遺跡分布図 (1/25,000)

112. 高田山古墳群	47. 西谷古墳群	48. 泉谷古墳群
50. 賀茂野須恵器窯跡	54. 池ノ谷古墳群	55. 老川遺跡
56. 池の奥古墳群	57. 牛坂古墳群	59. 稲葉山古墳群
60. 広所古墳群	61. 東山古墳群	103. 猪崎城跡
111. 庵我遺跡		

第2図　高田山1・2号墳と調査地位置図（注1から転載・加筆）

なお，今回の調査は平成元年10月18日から同２年１月12日までの期間行った。期間中，福知山市教育委員会をはじめ関係諸機関の協力を得た。また，現地作業に従事していただいた方々に感謝の意を表したい。

2.　調査の概要

①検出遺構

高田山１・２号墳については，1980年に山城考古学研究会によって測量調査が行われ，１号墳は一辺25mの方墳，２号墳は南北22m・東西19mの方墳であることが判明した。丘陵の南西端は崩落しているものの，古墳自体の残存状態は良好である(第２図)。築造時期については，台状墓的要素を残している点などから５世紀前半を中心にする時期と考えられている。

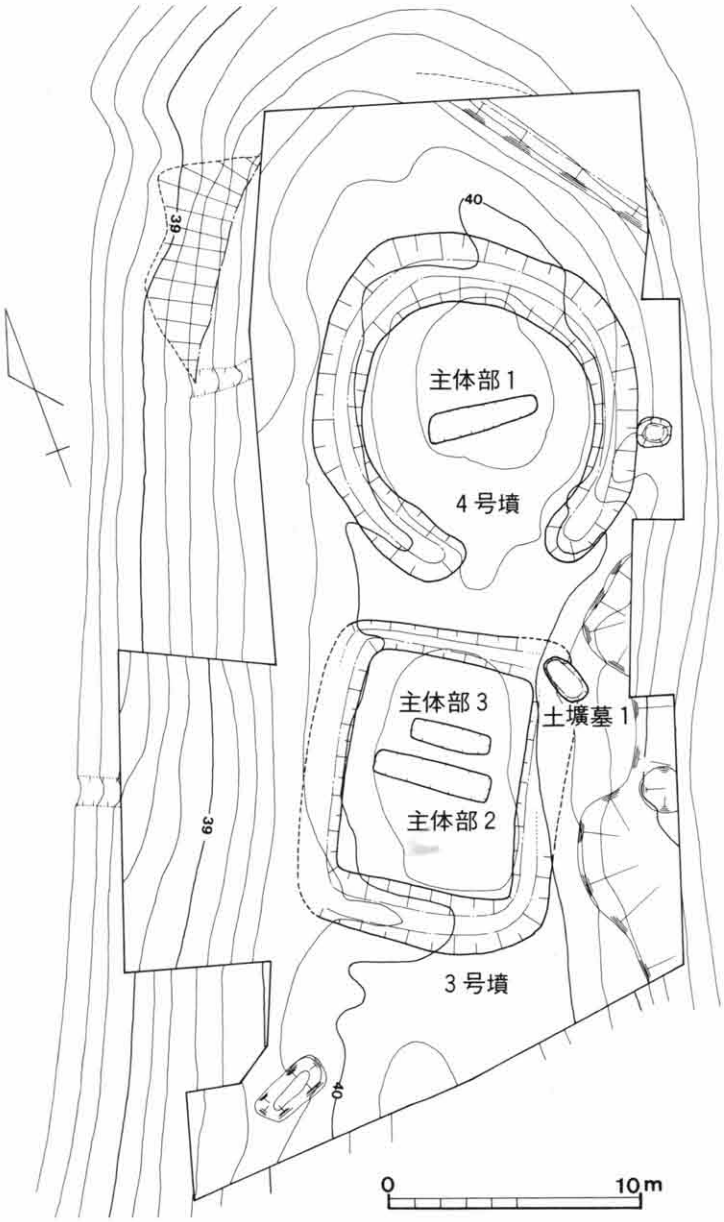
今回の調査地は，１・２号墳の北側に広がる平坦部分にあたる。１・２号墳のような隆起がないことから，時期が相違する古墳の存在が予想された。調査の結果，墳丘の大半が削平された３・４号墳と平安時代の土壙墓，時期不明のピットを検出した(第３図)。

３号墳　墳丘が削平されているため，墳高については不明であるが，南北11m・東西９mの規模を持つ方墳であることが判明した。墳丘中央では埋葬主体部を２基確認した。主体部２の掘形は1.15m×4.7mの規模を有し，棺は0.65m×2.6mである。棺の形式は通有に見られる「日」形の組合式木棺であるが，両木口には，拳大の礫と黄褐色粘土をていねいに充塡し，木口板が倒れ込まないように工夫されている。棺床は，淡黒褐色土を敷いて平坦にしている。また，棺床下の地山面には，主体部の主軸線と平行した溝が掘り込まれており，排水を目的としたものと考えられる。棺内東端床面直上で鉄鏃２点が出土している。主体部３の掘形は１m×3.2m，棺は0.5m×1.9mの規模を有している。主体部中央では長さ107cmの鉄刀が一振り出土している。これらの主体部の新旧関係は，規模も大きく中央に位置する主体部２が先行し，その後，主体部３が掘り込まれたと考えられる。なお，主体部２東側から土師器・高杯(第５図５)が２点出土している。

４号墳　３号墳の北側に隣接して築造された直径11mの円墳である。周溝は完結せず，南方に幅３mの陸橋状掘り残し部分がある。周溝内から土師器・須恵器片が出土している。墳丘中央では，磁北と直交する主軸線をもつ埋葬主体部を１基検出した。主体部１(第４図)は，0.7m×4.6mの規模を有している。墓壙幅については，東端を除く大半が不規則な状況であり，後世に攪乱を受けている可能性がある。棺の形式は，通有に見られる「日」形の組合式木棺である。棺床には基本的に拳大の礫を敷いているが，粗雑で空白も多い。木口板部は，断面観察と礫の希薄な部分からその位置を推定した。その結果，東西木口板

間の長さは2.8mとなる。両木口の棺外では，須恵器・蓋杯(第5図1～4)を3点ずつ元位置を保った状態で検出した。

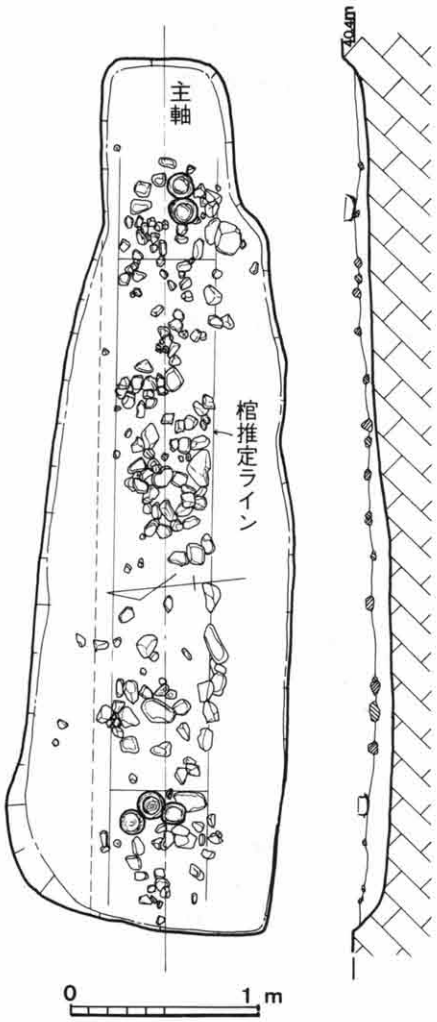
土壙墓1　3号墳周溝の北東隅部で検出した平安時代の墓である。墓壙の主軸線は，磁北とほぼ一致しており，1.2m×2mの規模を有している。壙内から底面に糸切り痕のある須恵器・椀が一点出土している。なお，今回の調査では，これと同時期の遺構は検出し



第3図　3・4号墳測量図

ておらず，周辺地域との関係で考えなければならない。

ピット　第3図では，繁雑になるためピット群については割愛したが，4号墳周辺を中心にその広がりを確認している。ピット内からの遺物は出土しておらず，時期設定はできないが，2・3棟の掘立柱建物跡が復原できる状況にある。



第4図　4号墳主体部実測図

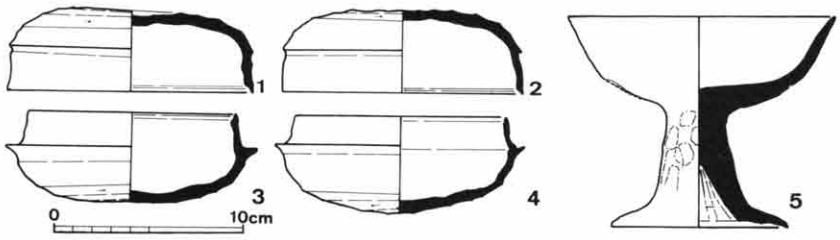
②出土遺物(第5図)

3号墳主体部2出土遺物　土師器・高杯5は，比較的深い杯部と屈曲し外方へ開く脚部をもつ。脚部外面には指頭圧痕が観察できる。口径14.1cm・器高11.4cmを測る。

4号墳主体部1出土遺物　杯蓋1・2は，天井部が平らで内傾する口縁部をもつ。また，肩部稜は比較的突出している。口径は，1が12.9cm，2が12.7cmである。杯身3・4は，ほぼ直立する立ち上がりを有し，内傾する口縁部をもつ。口径は3が10.9cm，4が11.1cmである。これらの蓋杯の特徴から陶邑編年TK23ないしTK47前後に比定できよう。

3. ま と め

今回の調査では，3号墳が方墳，4号墳が円墳であることが確認できた。その新旧関係については，伝統的な「方形」を踏襲している3号墳が先行して築造され，4号墳が後出



第5図　出土遺物実測図
1～4．4号墳主体部1　5．3号墳主体部2

すると考えてよい状況にある。これは，4号墳主体部には須恵器の副葬が見られるが，3号墳主体部には見られないことからもその新旧関係は首肯してよいであろう。

築造時期については，4号墳主体部出土須恵器が陶邑編年TK23ないしTK47前後に比定できる。一方，それに先行して築造された3号墳は，土師器・高杯の形態から5世紀中葉を前後する時期と考えられる。

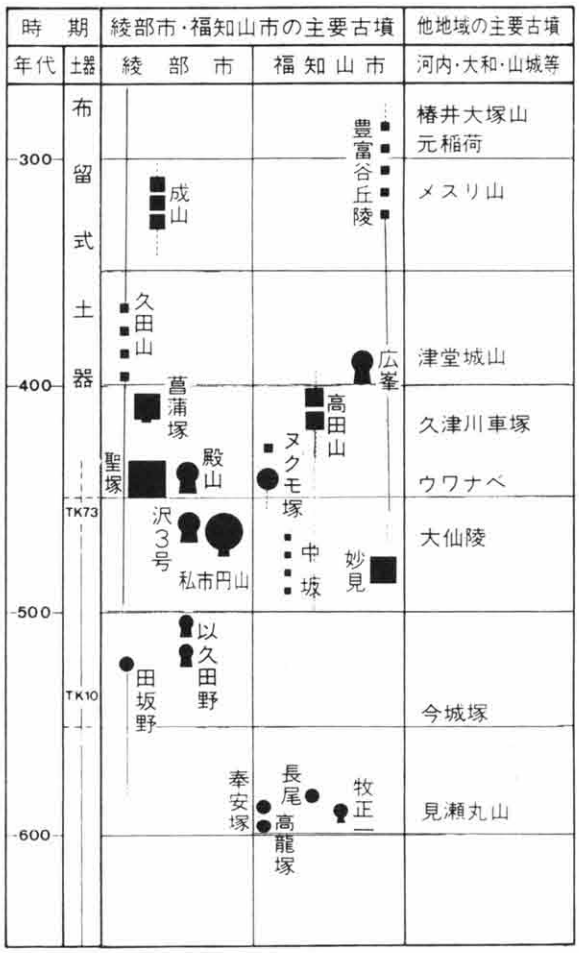
すでに知られている高田山1・2号墳は，一辺25m・墳丘高3mを測る高塚であるが，3・4号墳は，11mを基本とした規模であり，低墳丘であることなど両者の相違点も多い。この現象は築造時期の大幅な違いによるものと考えられるが，1・2号墳築造集団の勢力の低下ないし私市円山古墳に代表される畿内政権の直接的後押しを得た有力者の台頭となんらかの関連があるかもしれない。また，方墳(3号墳)から円墳(4号墳)へと墳形が移行する現象も，卓越した権力を有した有力者の台頭以降の政治的状況となんらかの関連があるのかもしれない。

今回の調査は，地味な調査ではあるが，上述のように解決すべき問題点を多く含んでいる。今後の整理作業によって，明らかにしていきたい。

(こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1　益田日吉「高田山古墳群」(『丹波の古墳』Ⅰ—由良川流域の古墳—山城考古学研究会)1983.12

付表　主要古墳編年表



平成元年度発掘調査略報

12. 長 良 遺 跡

所 在 地　熊野郡久美浜町浦明小字長良他

調査期間　平成元年7月6日～8月11日

調査面積　約480m²

はじめに　長良遺跡は，久美浜湾に望む標高15～16mの海岸段丘上に位置する。付近には弥生から中世にわたる複合遺跡である日光寺遺跡，鳥取城跡，浦明遺跡などが段丘上に点々と分布している。調査は，国道178号の道路新設改良事業に先立ち，京都府土木建築部の依頼を受けて行った試掘調査である。

調査概要　調査はまず，道路計画線に平行に，幅2mのトレンチを6本設定して行った。その結果，遺構の存在が認められたトレンチを拡張し，Aトレンチとした。ここではAトレンチで検出した主な遺構について述べる。

掘立柱建物跡SB1

1間×2間の建物跡である。規模は2.1m×3.9mを測る。時期を特定し得る遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB2

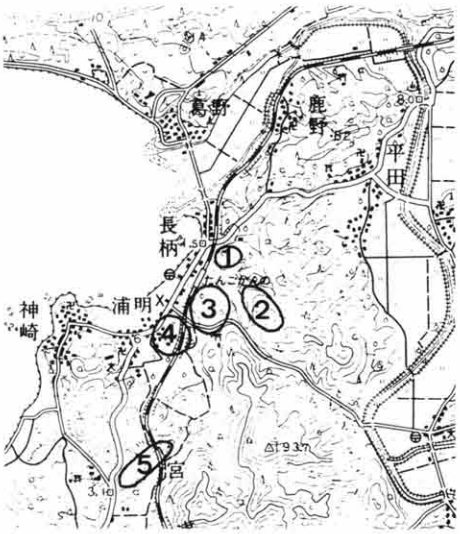
1間×1間の建物跡である。規模は1.8m×1.8mを測る。遺物が出土していないため，時期は不明である。

掘立柱建物跡SB3

2間×4間の南北棟に復原できるものと思われる。規模は，6.5m×4.5mを測る。この建物を構成するピットのひとつが切っている焼土中から，7世紀末の須恵器が出土していることなどから，この建物の時期は8世紀代と考えられる。

掘立柱建物跡SB4

1間×1間の建物跡である。規模は1.4



第1図　長良遺跡周辺遺跡分布図
1. 長良遺跡　2. 鳥取城跡　3. 日光寺遺跡
4. 浦明遺跡　5. コクバラノ遺跡

m×3.0mを測る。遺物が出土していないため時期は不明である。

柵跡SA1

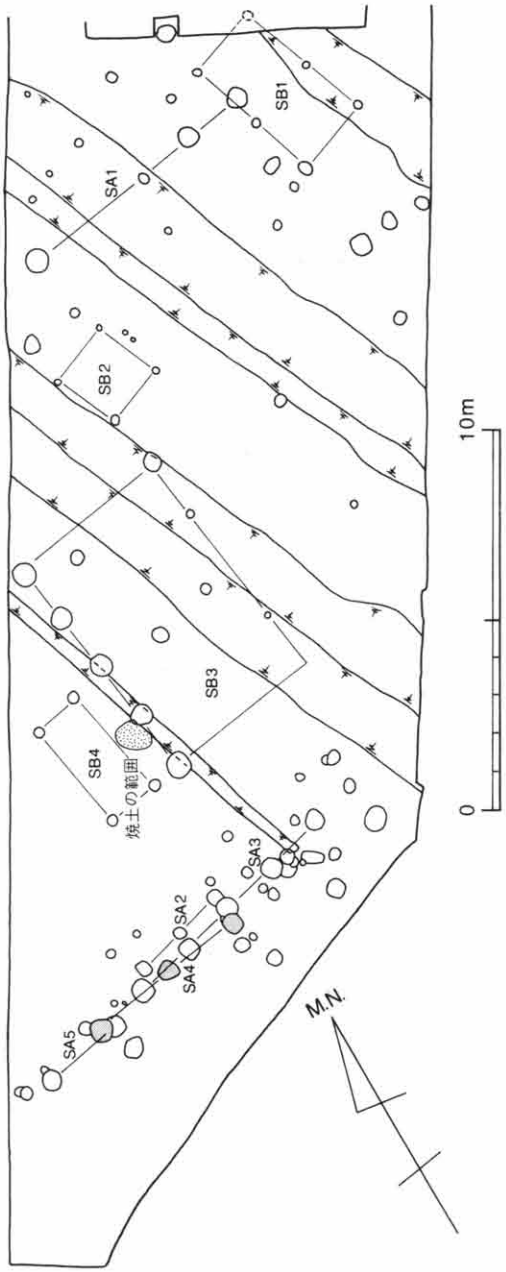
東西方向にのびる柵であると考えられるが，掘立柱建物の一部であることも考えられる。掘立柱建物跡SB3の軸線の方向と一致することから，8世紀代のものと考えられる。

柵跡SA2～5

東西方向にのびる柵群である。段丘平坦面の南端に位置し，これより南側は谷となる。いずれも，8世紀代の内におさまるものと考えられる。

まとめ　Aトレンチは，削平を受けているにもかかわらず，多くの遺構を検出することができた。とくに8世紀代頃と思われる建物や柵が，北を意識して建てられていたことは，谷をひとつ隔てた段丘に位置する日光寺遺跡と共通する点であり，注目される。

（森島　康雄）



第2図　長良遺跡平面図（1/200）

13. 山 形 古 墓

所 在 地　熊野郡久美浜町大字大井小字山形

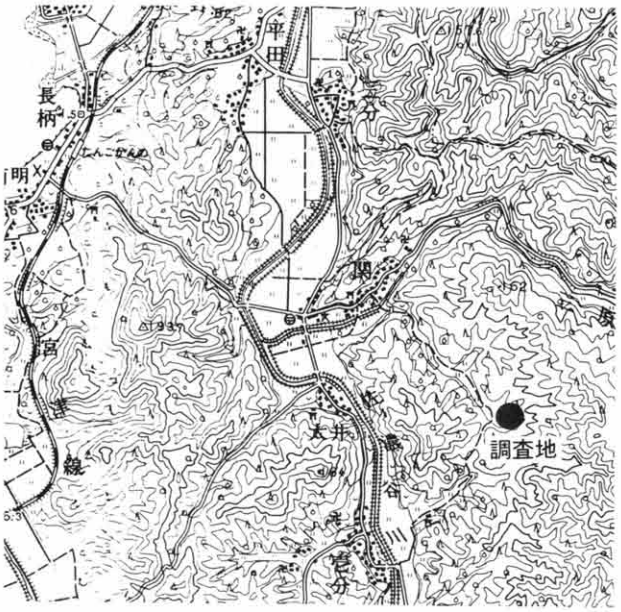
調査期間　平成元年７月17日～８月18日

調査面積　約200m²

はじめに　山形古墓は，標高85m・東西約40m・南北約25m，比高差約5mの独立した丘陵に位置する。調査前には，腐植土の間から2～3の石囲いと石碑・石仏・五輪塔片などが散乱していた。特に南側の斜面地には，人頭大の石が多く見られた。丘陵の東と南の裾には100m²足らずの平坦地があり，地形を子細に見ると，南側斜面には2～3のテラスが造られている。今回は，農林水産省近畿農政局の依頼を受け，９基の墳墓と南側平坦地の一部を発掘調査し，加えて表土剝ぎを行って，５基前後の墓を検出・確認した。

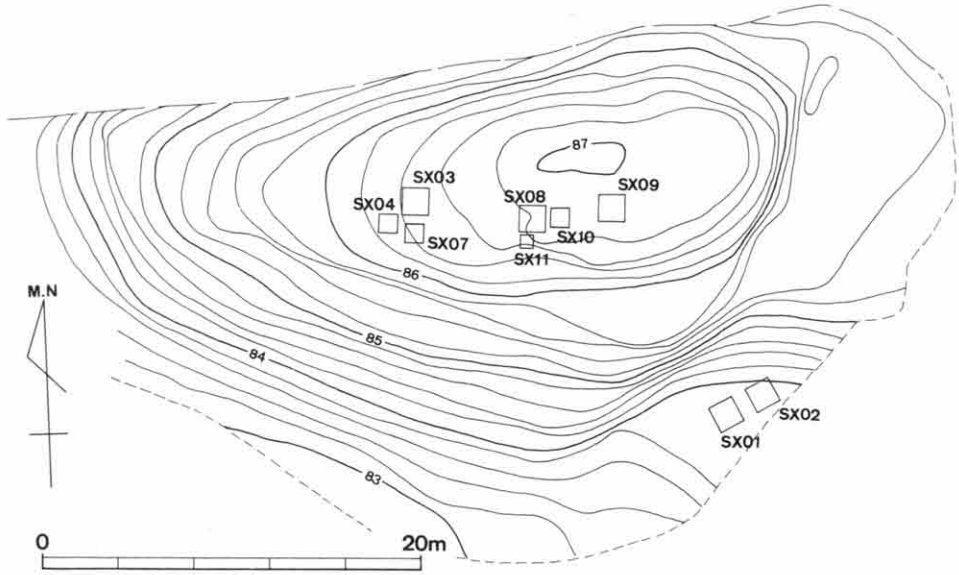
調査概要　SX01・02は，南側裾部にあり，人頭大の石で石囲いを行っている。それぞれ一辺1.5m前後である。SX01は，石組の中央に石仏が倒れており，SX02には石碑が建っていた。SX02の周囲には浅い溝が巡っている。下部構造は，ともに一辺1～2m，深さ約60cmの方形土坑が穿たれていた。SX01より土師器皿片が出土したのみである。

SX03は，径約3mの盛土を有する墳丘の中央に，30cm×70cmの小石室が造られていた。石室内には土師器製の筒型土器―通有には銅製経筒を納める外容器として用いられるが，蔵骨器として使用された場合もある―が２個体と土師器蓋２が納められていた。他に遺物は出土していない。小石室西側の小土坑内に，陶器壺(越前焼？　13～14世紀)が廃棄されていた。



第１図　調査地位置図（1/25,000）

SX04は，石が乱雑に集積され，明瞭な石組は認められなかった。石を除くと，80cm×95cm，深さ5cmの土坑



第2図　現地形図及び遺構配置図

を検出した。遺物はなかった。SX07は，SX03の南側にある盛り上がりで，石が散乱していた。石の直下が地山で，施設は検出されなかった。SX08・09は，SX03と同様，径2m程度の盛り上がりが認められたが，ともに埋葬施設は確認できなかった。しかし，SX08は中央やや北寄りの松の切株のところに埋葬施設があると思われる。SX10はSX08に東接し，SX04と同じく浅い土坑と四周の石組を検出した。SX11はSX08に南接し，石が無秩序に集められ，下部に径15cm，深さ40cmの小土坑を検出した。

南側平坦地では，約30cmの整地層(15～16世紀の土器を含む)を除去すると，径20～50cmの土坑群を検出した。いくつかの土坑内から，焼土・炭片・土器片を少量認めた。骨片は出土しなかった。おそらく，木櫃・木箱等に火葬骨を納めて埋葬した痕跡と考えられる。

まとめ　最後に問題点を列挙し，若干のまとめを行っておく。

①当遺跡は丘陵全域が墓所で，丘陵の南の平坦地にも広がっていたと推定される。

②出土した遺物には，石仏・五輪塔，貨幣，土器片がある。貨幣は「崇寧通宝」(北宋銭1102年初鋳)で，京都府内での出土は珍しい。

③遺物の出土は少なかったが，この墓所は13・14世紀頃にSX03が造られ，16世紀代以降にSX01・02等が造られている。他の墓もこの年代観の間に納まるものと考える。

④整地層より，当初は壙を穿つだけの墓であったのが，後には区画をもつものに変わる。

⑤SX03は，普通経塚と扱われるが，土師器筒型土器は蔵骨器に使用された可能性がある。

⑥中世墓としては，周辺にヲクビ古墓があり，これとの関連・構造の差異が注目される。

(岩松　　保)

14.　太田・下後古墳群

所 在 地　竹野郡弥栄町和田野小字太田・猪ノ蔵

調査期間　平成元年８月７日～10月20日

調査面積　太田3・4号墳約330m^2，下後1・5号墳約200m^2

はじめに　この発掘調査は，農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の和田野団地の造成工事に先立ち，同局の依頼を受けて実施した。

太田・下後古墳群は，竹野川西岸の丘陵上に立地し，太田古墳群は総数約37基からなり，調査対象となった3・4号墳は群の最北端に位置する。下後古墳群は太田古墳群の西に位置し総数５基からなり，1・5号墳が調査対象となった。調査は，太田3・4号墳，下後１号墳については全面発掘，下後５号墳は墳丘裾部に対し試掘調査を行った。

調査概要

1.　太田３号墳　調査の結果，古墳ではなく自然地形であることが判明した。

2.　太田４号墳　太田３号墳の北側に隣接し，墳丘を地山整形と若干の盛土で形成する径16mを測る円墳である。丘陵と切断する幅2mを測る溝を有する。高さは丘陵背後と区画する溝から0.8m，北からの見かけの高さ2.7mを測る。調査の結果，古墳時代後期の主体部３基，弥生後期末の土坑５基を検出した。

古墳築造の契機となったのは，墳丘平坦面のほぼ中央に構築された第３主体部であり，二段掘形をもつ墓壙（上段長さ5m・幅1.8m，下段長さ4.4m・幅0.8m，主軸N-23°-E）内に組合式木棺を納めたものである。副葬品として棺内より，鉄斧１点・刀子１点・鉄鏃１点が出土した。

第３主体部の墓壙長辺西側を切る第２主体部は，第３主体部に後続する木棺直葬であり，墓壙は第３主体部同様，二段掘形（上段長さ5m・幅2m，下段長さ3.4m，幅0.7m，主軸N-25°-E）を有する。墓壙南側で須恵器の杯２点・杯蓋２点，墓壙中央付近で鉄鏃８点を検出した。その出土状況からみ

第１図　調査地位置図（1/50,000）
1．太田古墳群　2．下後古墳群

て，棺蓋に置かれていた副葬品が棺の腐食に伴い棺内に落ち込んだものと考える。

最も新しい第1主体部は，第2・第3主体部を切って構築されている。墓壙は第2・第3主体部同様，二段掘形(上段長さ6.8m・幅2.4m，下段長さ4.1m・幅0.6m，主軸N-9°-W)を有する。墓壙に納められた木棺は塗布されていた赤色顔料(赤色硫化水銀？)の範囲から幅0.5m・長さ4mを測る組合式木棺が想定される。第1主体部の大きな特徴として，須恵器の大量副葬という点をあげることができる。墓壙内埋土から甕2・瑞2・長頸壺1・短頸壺1・杯身3・杯蓋4の計13点，棺内からは転用枕として使用された杯1・杯蓋1の計2点，以上，総計して15点にも及ぶ須恵器が副葬されていた。

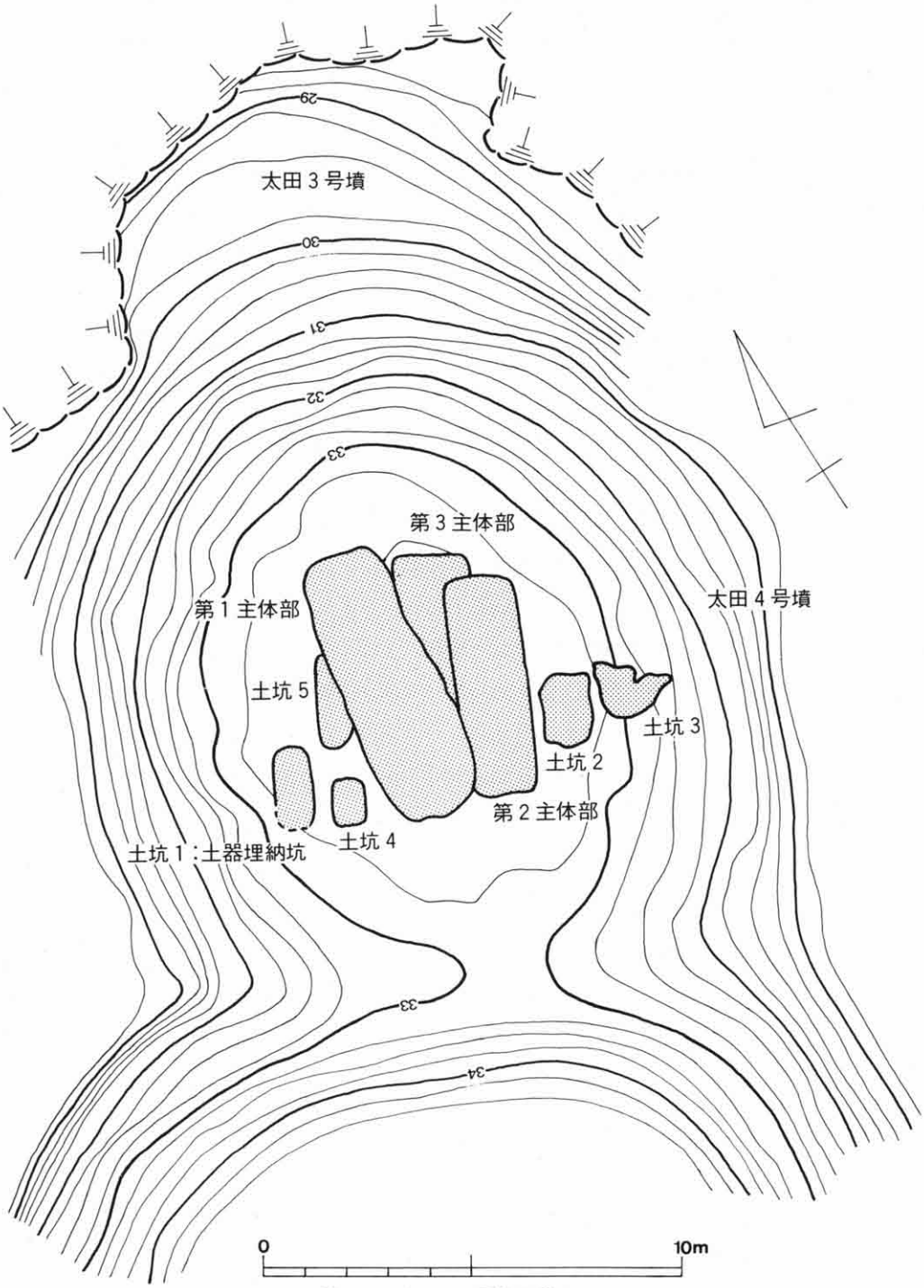
木棺内で検出した須恵器転用枕の位置から，棺内には被葬者が南枕で安置されたことが判明した。被葬者を中心に棺内の副葬品の配列状況について述べると，頭頂部に刀子1点が棺に直交して，体の右側に沿って切っ先を頭側にした鉄鏃が7本，右手付近に刀子1点，左足元から棺の木口よりに刀子3点が副葬されていた。

その他に，棺外副葬品として墓壙東側および北側の棺裏込め土中より切っ先を北に向けた鉄鏃が出土している。土層観察の結果，この鉄鏃は，棺を安置し，裏込め土を棺の高さまで施した時点で副葬されたものと考えられる。

以上，3基の主体部の構築時期について整理しておくと，第1主体部は出土した須恵器から6世紀中頃の年代を，第2主体部には6世紀前半の年代を与えることができる。第2主体部に先行する第3主体部については出土遺物に乏しく，明確な時期を与えることはできないものの，第2主体部と主軸が平行することから，第2主体部の構築時期とそれほど隔たらない6世紀初頭頃の年代を考えておきたい。

古墳築造以前の遺構として，性格は不明ながらも弥生時代後期末に比定される土坑5基を検出した。その内，墳丘平坦部の西肩に位置する長方形プランをもつ土坑1(長さ1.5m・幅1.0m)は土器埋納用の土坑と考えられ多量の弥生土器(器台1・高杯6以上・蓋1・装飾台付壺1)，鉄剣1口が出土した。この土坑から出土した弥生土器はいずれも一般集落から出土する土器とは異なり台状墓などで出土する祭祀用の土器としての性格をもつものと考える。遺構としては確認されなかったが，弥生時代後期末に台状墓が構築されたものと推測できよう。第2・第3主体部の埋土から多量の弥生土器片が出土したことはこの推測を裏付けるものである。

3. 下後1号墳 太田4号墳同様，墳丘を地山整形と若干の盛土で形成する径12m，高さ約1.6mを測る円墳である。幅2mを測る溝により自然地形と区画する。墳丘は後世の削平を受け主体部はすでに失われていたが，墳丘中央部の地山直上よりほぼ完形の鉄剣1口が出土している。本来は木棺内に副葬されたものと考える。古墳に伴う遺物として溝底部



第２図　太田3・4号墳地形図

で土師器椀1点が出土した。この土師器により，この古墳の築造時期を6世紀代に比定することができる。

その他，墳頂部北東において「L」字状の掘り込みを検出した。性格は不明。なお埋土から中世黒色土器片が出土している。

4. 下後5号墳 下後1号墳の西側の丘陵に位置する径15mを測る円墳である。墳丘北側に幅1m・長さ6mのトレンチを設定し掘削を行った。その結果，自然地形の傾斜が確認され，明確な墳丘裾を持たないことが判明した。

まとめ 今回4基の古墳を調査し，太田4号墳からは須恵器をともなう主体部を検出することができた。近年，竹野川流域で須恵器を副葬する木棺直葬墳の発掘例が増加しているが，この古墳では時期の変遷とともに須恵器の扱われかたが異なる。すなわち，須恵器をもたない第3主体部，棺上に須恵器を副葬する第2主体部，須恵器を棺上および棺内に副葬する第1主体部への変遷をたどることができ，今後，古墳の副葬品としての須恵器を検討するうえで貴重な資料となった。

また，太田4号墳の所在する丘陵上には，当古墳群の盟主墳といえる太田2号墳(円墳径30m・埴輪列・1970年京都府教育委員会調査)が所在する。時期的には太田4号墳とほぼ同時期と考えられ，墳丘規模の格差，副葬品の格差からみると，太田4号墳の被葬者は太田2号墳の被葬者に対し従属的な位置にあったものと推測される。今後，太田古墳群の構造や形成過程に対し詳細な検討を加えていきたい。

その他，太田4号墳から弥生後期末葉に比定しうる土坑を検出し，台状墓の存在した可能性を考えたが，太田2号墳からも弥生土器が出土しており，弥生時代後期，太田古墳群の所在する丘陵が墓域として利用されていたものと考えられ，この地域の弥生時代の墓制を考えていくうえで今後，注意していく必要があろう。

(増田　孝彦・石崎　善久)

15. 阿婆田窯跡群

所 在 地　中郡大宮町字善王寺

調査期間　平成元年8月7日～平成2年1月24日

調査面積　約280m²

はじめに　今回の調査は，農林水産省近畿農政局が計画推進している「丹後国営農地開発事業」の大野団地造成にともない，同局の依頼を受けて実施した。阿婆田窯跡群は，従来から3群・十数基の窯で構成されていることが知られていた。この中で今回は，造成に係るC支群の発掘調査を行った。C支群は，善王寺集落から西に深くのびる谷筋の，東斜面に位置し，数十年前には窯体の一部が崖面に露出していたこともあった。

調査概要　調査はまず，京都府教育委員会が試掘調査を行い，窯体の一部を確認した。これをうけ，斜面部分の拡張を行ったところ，6基の窯体が近接して築造されていることが判明した。窯体は，焚き口部まで残存しているものはなく，削平等によって残存状況の悪いもの(1・4・5号窯)や，地滑りなどによって窯体の一部が，下方にずり落ちていたもの(2・3号窯)もある。各窯体焼成部の床面傾斜角は，30°～35°と比較的急傾斜に造られている。窯体内からは，杯類を主体に多器種の須恵器が出土しており，特に2号窯の焼成部及び燃焼部には，最終操業に伴う土器が数多く取り残されていた。操業時期は，各窯とも，奈良時代中頃を中心とするものである。

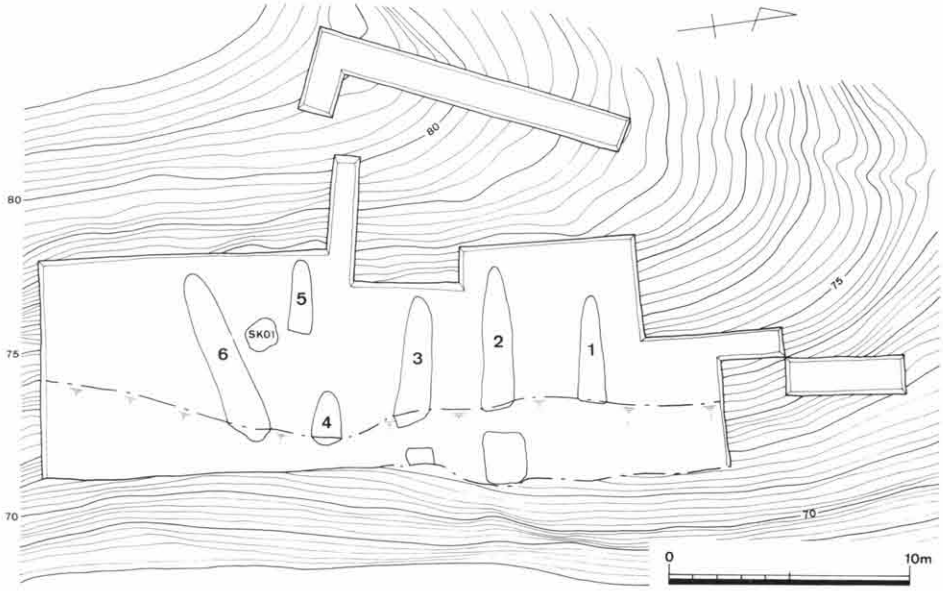
まとめ　今回の調査では，奈良時代後半期の6基の窯体を確認した。各窯の操業時期・前後関係等は今後の検討課題であるが，6基が極めて近接した位置にあり，時期的に見ても比較的短期間の操業であるなどの点は注目される。また，焼成土器の中に鉄鉢・異形の平瓶等の器種や，ヘラ書き文字(□田)の施された杯蓋，内面の当て具痕に車輪文が見られる甕等の特徴的な遺物が含まれている。京都府北部地域では，夜久野町末窯跡群に見られる大規模な生産地に次ぐ規模を持っており，流通範囲・供給先等生産体制も含めて今後検討すべき課題である。

（森　　正）

第1図　調査地位置図（1/50,000）

付表　阿婆田窯跡群C支群一覧表

窯体番号	窯体現存長	最大幅	床面傾斜角	出土遺物
1号窯	4.4m	1.15m	約 30°	杯・蓋・皿・甕他
2号窯	6.1m	1.25m	約 35°	杯・蓋・皿・鉢・壺・平瓶他
3号窯	5.5m	1.15m	約 35°	杯・蓋・皿・甕他
4号窯	2.5m	1.10m	約 32°	杯・蓋・甕他
5号窯	2.5m	1.05m	約 31°	杯・蓋他
6号窯	7.2m	1.47m	約 33°	蓋杯・壺・甕・須恵質紡錘車他



第2図　遺構配置図

第3図　調査地全景（東から）

16.　古殿遺跡第４次

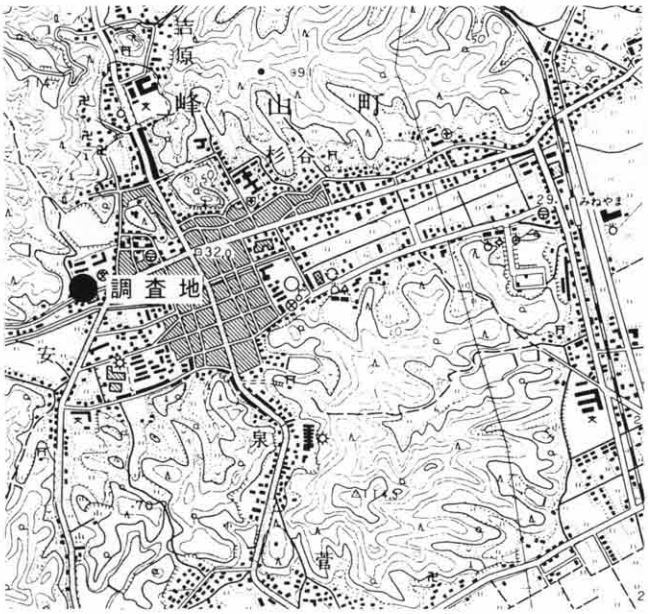
所 在 地　中郡峰山町字古殿

調査期間　平成元年８月８日～10月12日

調査面積　約340m²

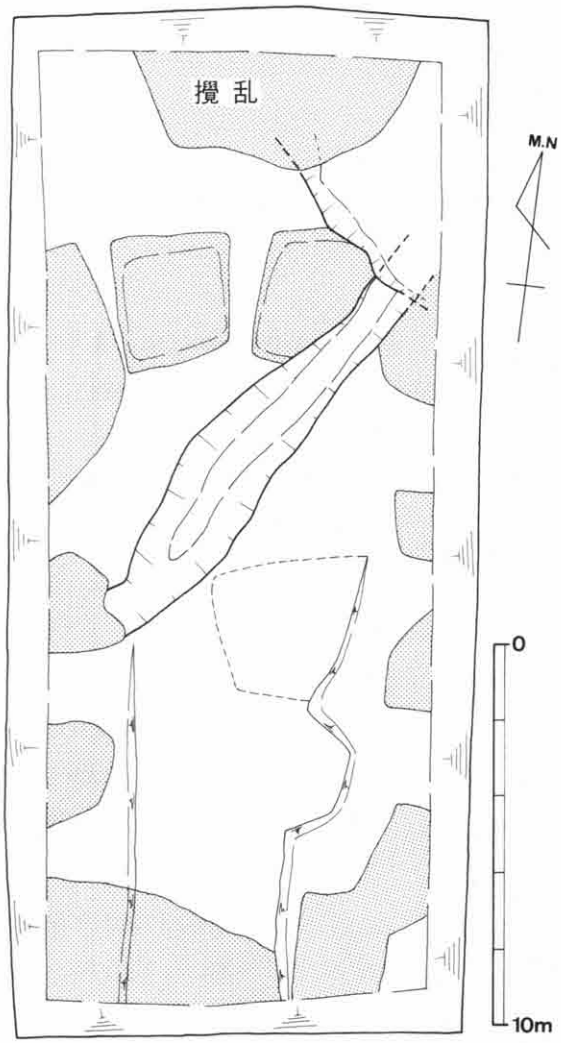
はじめに　古殿遺跡は，現在の府立峰山高等学校を中心に分布している。当遺跡は学校施設の老朽化に伴う建て替えに際して，今までに昭和52・57・61年度の３度にわたって京都府教育委員会の依頼を受けて発掘調査を実施しており，今回で４度目である。過去の調査では，弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出され，当時の集落跡を確認している。とりわけ，弥生時代後期～古墳時代前期にかけての木器や土器が多数出土している。峰山高等学校は，３本の丘陵が近接するその先端に立地しており，２つの谷を埋め立てて敷地が造られ，従前の調査地は主にこの谷部に当たっていた。今回の調査地は同校敷地内の南西部にあたり，第３次調査の南西約30mに位置する。調査地の西側には山尾根がすぐ近くにまで迫り，旧地形の谷部に位置した過去の調査とは異なった立地にある。

調査概要　調査は，重機により遺構面まで掘り下げた後，手掘り作業に切り替えて実施した。今回の調査地は，西から東に張りだす丘陵端に当たっていることから，黄褐色～赤褐色の山土の地山面が遺構面となった。この面には，旧校舎の基礎坑と廃材の捨て穴が深く掘り込まれ，コンクリートやガラス，鉄筋等が捨てられていた。そのため，包含層・旧地形は全面にわたり削平され，地形は大きく改変されていた。



第１図　調査地位置図（1/25,000）

検出したのは，調査地の中央を北東に走る人工の溝と北東隅で弥生時代後期～古墳時代前期の包



第2図　検出遺構平面図

含層である。この溝は，幅1.1～2.5m，検出長11.6mで，検出高は45～65cmである。当初の深さは，周囲の状況から1.2m以上に復原できる。北東隅で遺物包含層に流れ込む。西側の尾根筋に直交する(＝等高線に平行する)ことから自然のものとは考えにくく，人工の溝と判断する。南端は削平・攪乱坑により消去している。検出した南端と北端の溝底の差は約40cmで，北側に下がる。埋土内から遺物は出土せず，時期を決められない。また，北東隅の黒色を基本とする包含層は4m×6mの範囲で確認できた。白色粘土混じり黒色粘質土層(L＝36.1～36.4m)から庄内期～古墳時代前期の土器の細片が出土した。これから下層では遺物は出土しなかった。白色粘土混じり黒色粘質土は，分布する高さ・包含する遺物からみても，第3次調査の第Ⅲ層(黒色粘質土層)に対応させて矛盾はない。今回はこの層では遺構を確認できなかった。出土遺物は土器のみで，すべて，調査地の北東隅部の遺物包含層・攪乱土坑から出土した。

まとめ　旧地形の復原から推定して，今回の調査地は丘陵尾根上にあたり，2次調査Aトレンチとともに，高所に位置し，集落の居住区域にあたっている。しかし，今回の調査では，検出遺構が溝のみであり，顕著な遺構・遺物は確認できなかった。出土遺物等の確証は得られなかったが，今回検出の溝は，その位置・規模から弥生時代後期～古墳時代初期の集落を画する溝とも考えられる。　(岩松　保)

17.　宮津城跡第６次

所 在 地　宮津市字鶴賀(JR宮津駅舎)

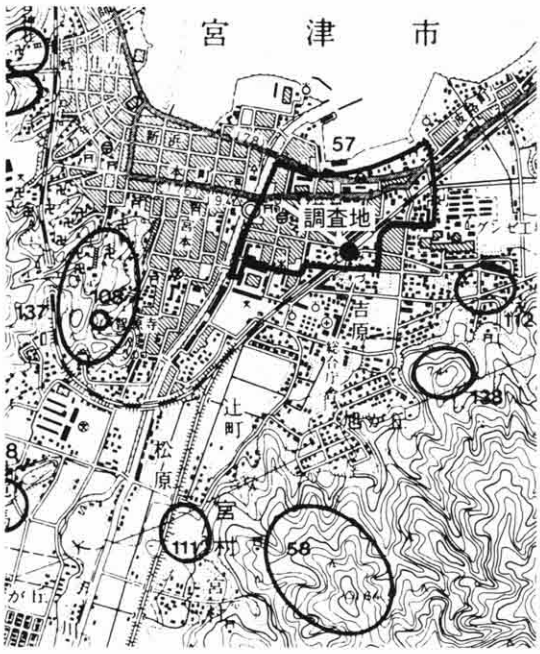
調査期間　平成元年９月５日～10月21日

調査面積　約500m²

はじめに　宮津城は，安土桃山時代に築造されてから明治時代の初めに取り壊されるまで，約300年間の歴史をもつ近世城郭である。今回の発掘調査は，宮津市の依頼を受けて，宮津城内に位置しているJR宮津駅の駅舎改築に先だって行った。

調査概要　今回の調査では，調査地内の大部分が宮津城の内堀にあたることが判明した。内堀の幅は，約22mを測る。内堀の北側が二の丸，南側が三の丸である。

a．石垣１　内堀北側の石垣で，絵図によれば隅櫓の一部であると考えられる。石垣の上部は取り壊され，堀内に多くの石が廃棄されていたが，石垣の基底部分が遺存していた。ここでは石垣を支える胴木や石垣の裏側に詰め込んだ栗石が確認された。



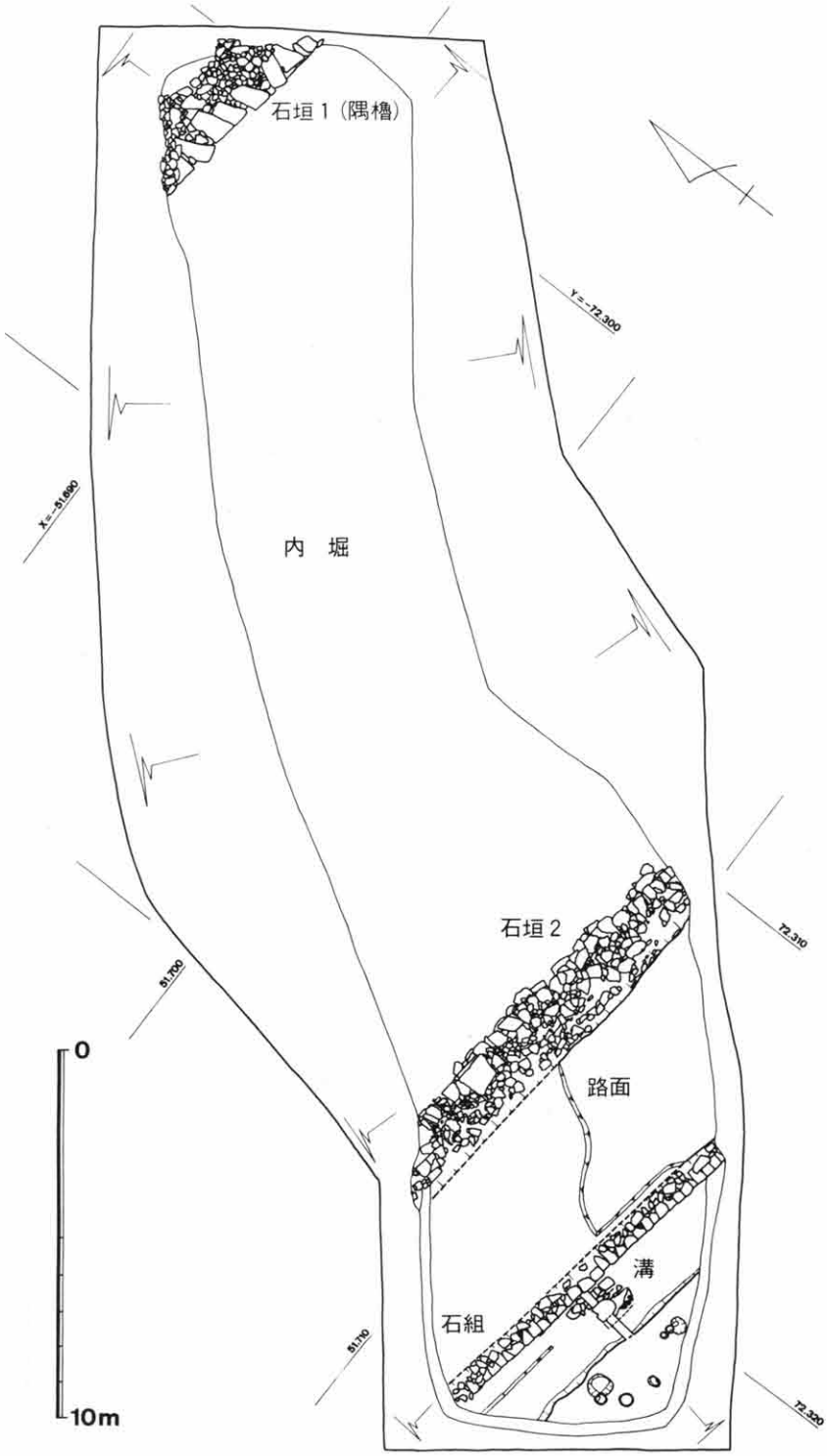
第１図　調査地位置図（1/25,000）
57.宮津城跡　58.八幡山城跡　108.智源寺裏遺跡
111.宮村遺跡　112.惣遺跡　137.大久保山城跡
138.惣村城跡（京都府遺跡地図第１分冊1988より転載）

b．石垣２　内堀南側の石垣で，3～4段が遺存していた。石垣１と比べて，大小の石がやや乱雑に積まれているのが特徴的である。

c．路面　石垣２の南側で確認したもので，内堀に沿う道の存在が明らかとなった。路面は，小石と土を混ぜ合わせて固く叩きしめている。路面の幅は約5mを測る。

まとめ　今回の調査では，宮津城の内堀両側の石垣を検出し，内堀の幅を確認した。二の丸の南端および三の丸の石垣は，これまでに確認されておらず，地下に埋もれている宮津城と現在の市街地との対応関係を考えるうえで貴重な成果である。

（鍋田　勇）



第２図　検出遺構平面図（S＝1/200）

18.　長岡京跡左京第226次(7ANFKS)

所 在 地　向日市上植野町車返8-10ほか

調査期間　平成元年7月28日～11月27日

調査面積　約1,200m²

はじめに　今回の調査は，向日合同宿舎の建設に先立ち，大蔵省近畿財務局の依頼を受けて行ったものである。

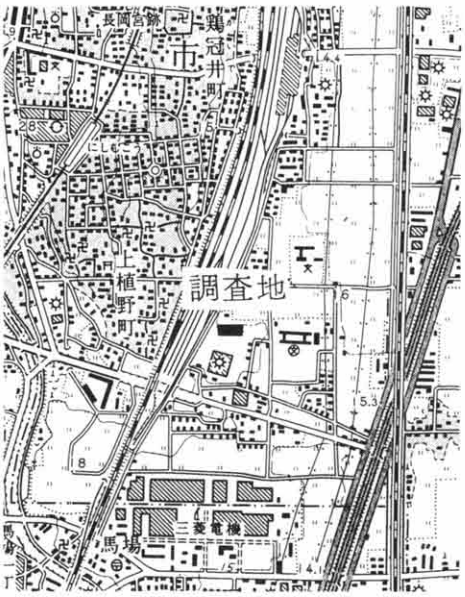
調査地は，長岡京条坊復原の左京三条一坊十二町・十三町の推定地にあたり，東一坊第二小路が南北に通る地点にある。周辺では随所で調査が行われており，なかでも東側の府立向陽高校の敷地内では三条大路の両側溝や掘立柱建物跡などが検出されている。

今回の調査では，主として長岡京のあった前後の時期の遺構と，長岡京のあった時期よりも前の時代の遺構を検出した。

長岡京跡の調査概要　調査地の西側で検出した溝SD22609が東一坊第二小路の東側溝に，溝SD22619が東一坊第二小路の西側溝にあたるものと考えられる。

この道路跡は，約0.7km南の左京第176次調査や，約1.5km南の左京第204次調査でも調査が行われている。これらの調査成果によると東一坊第二小路は，幅約9mの道路であったことがわかっている。今回，調査地の西側で検出した溝SD22609・溝SD22619もこれらの調査によって検出された側溝の延長上に当たっている。遺物は，土師器の杯などが若干出土した。

宅地跡(左京三条一坊十三町)の調査では，溝状遺構と掘立柱建物跡・土坑などを検出した。東一坊第二小路の東側溝から東へ約3mのところに宅地内に掘られた溝SD22601がある。この溝は，当初水溜状の掘形を持っていたが，次第に礫に埋もれ，最終的には溝SD22611の幅にまで狭まったものと考えられる。この溝の中からは，土師器の杯や椀・甕・蓋，須恵器の甕や壺，瓦



第1図　調査地位置図 (1/25,000)

など比較的多くの遺物が出土した。これらに混じって，直径20cm程度の漆被膜や漆を入れた土師器の椀なども出土している。また，この溝の北側には，ゴミ穴と思われる土坑SK22610が掘り込まれており，最下層で草本類の堆積層が認められた。この草本類の資料については現在分析中である。溝の西側には轍跡SX22613が認められた。長岡京造営時のものと思われる。

溝SD22601の東側で，掘立柱建物跡２棟を検出した。西側の建物跡SB22620は，梁間２間×桁行２間で，廂をもつ建物跡のようである。東側の建物跡SB22621は，梁間１間×桁行３間の建物跡である。東側の建物跡の柱穴は一辺0.9mの方形で，根石や礎板をもつ。また，桁行１間が1.8mであるのに対して，梁間１間は5m近くもある。このような規模を持つ掘立柱建物跡は，宮域を除くとあまり知られていない。

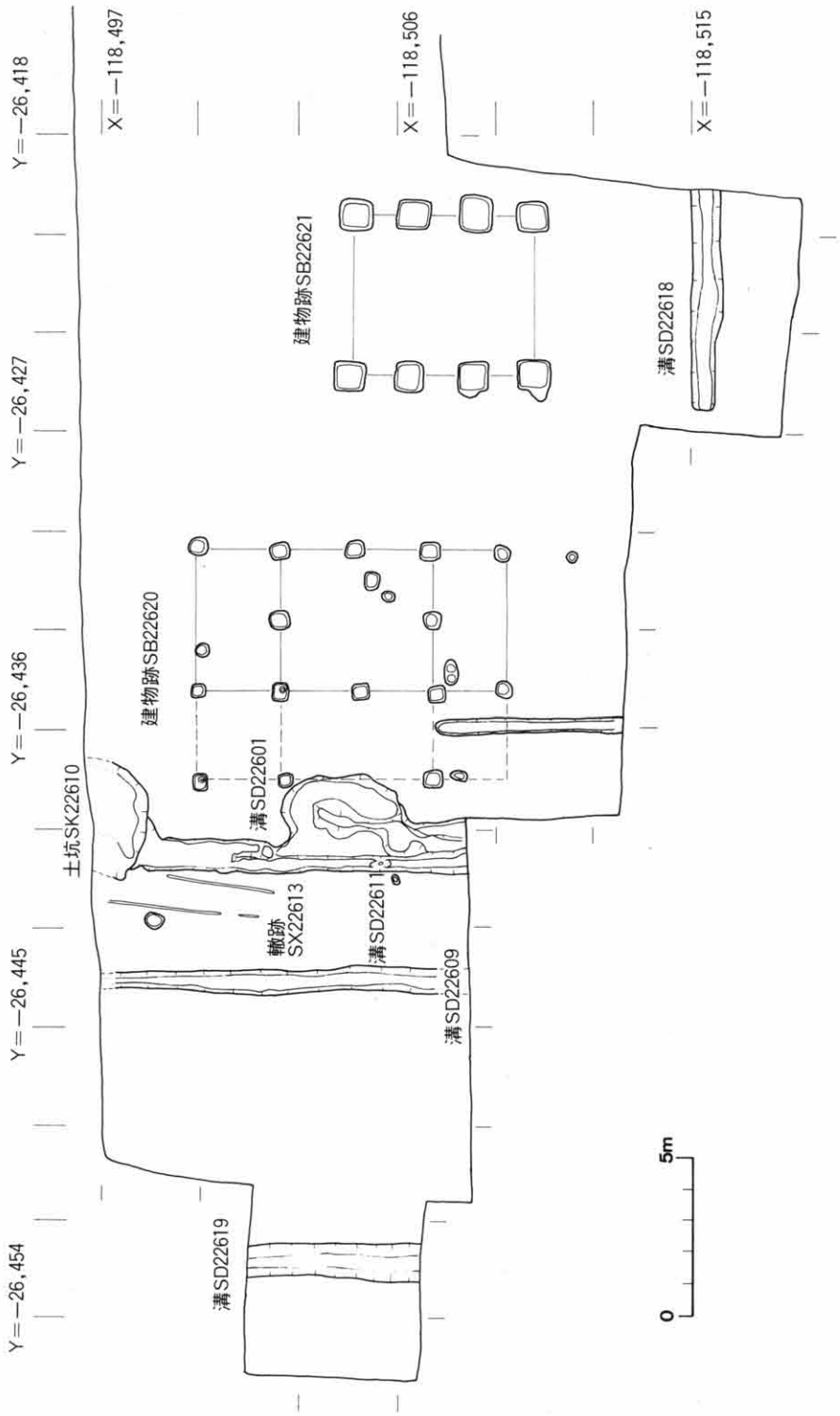
掘立柱建物跡の南側には町割溝と考えられる溝SD22618がある。

長岡京下層の調査概要　調査地の下層は，礫層や砂層が続いており，流路の跡と思われる。この流路跡の東側には護岸用と思われる杭列が打ち込まれていた。この流路跡の年代は，流路跡の上面や杭列付近で出土した須恵器から古墳時代と考えられる。また，流路跡上面の窪みに粘土の堆積した部分が数か所に見られ，木皮をはじめ，木材を加工した際に出土した木片や建築部材かと思われる木製品などが出土した。時期を確定する資料が少ないが，出土状況から長岡京造営前から古墳時代末以後のものと考えられる。

古墳時代の礫層は2m近くあり，この礫層を取り除いたところで暗黒褐色粘質土を検出した。暗黒褐色粘質土の堆積は0.3m程度で，礫混じりの緑灰色粘質土へと続いている。この最下層の調査では，自然流路を検出しただけで，遺物はほとんど出土していない。

おわりに　今回の調査では，東一坊第二小路を検出することができ，これまでの調査成果を裏付けることができた。また，東側の建物跡SB22621の性格については，今後さらに検討する必要があろう。

調査地北側には長岡京条坊復原のより所となった「蓮池」の推定地である左京三条一坊十町がある。近年の長岡京跡の調査成果によれば，今まで言われていた大路の幅が小路幅しかなかったり，小路部分が大路幅となることがわかってきている。このため従来の条坊復原図から東西道路を南もしくは北へ二町分ずらして考えることが必要となってきた。仮に二町分東西道路が南に下がることになれば，調査地内の西側部分が左京三条一坊十町となり，蓮池ということになる。以上のことから当調査地は，発掘調査によって蓮池の位置を確定できる可能性が高い地点であり，長岡京を解明する一つの手掛かりとなりうる重要な場所である。しかし，今回の調査では，東一坊第二小路の西側宅地部分についての調査はほとんど行うことができなかった。次回の調査に期待したい。　（三好　博喜）



第2図　長岡京期遺構実測図

19.　木津川河床遺跡(YKK-7)

所 在 地　八幡市八幡

調査期間　平成元年5月17日～9月8日

調査面積　約2,000m²

第1図　調査地位置図（1/50,000）

はじめに　今回の調査は，前年度に引き続き，京都府土木建築部の依頼を受けて，水処理施設の建設予定地の調査を実施した。その結果，中・近世の水田及び畑地に伴う素掘り溝，古墳時代の竪穴式住居跡，土坑などを検出した。また，16世紀末の噴砂をトレンチ全面で確認した。

調査概要　素掘り溝は，大半が瓦器椀を含んでおり，中世に属するものが多い。溝は，幅0.2～0.3m・深さ0.2m・長さ10～15mを測り，約60本を東西・南北方向に検出した。この小溝群は，水田，畑地の区画，規模を知る上で貴重な資料である。

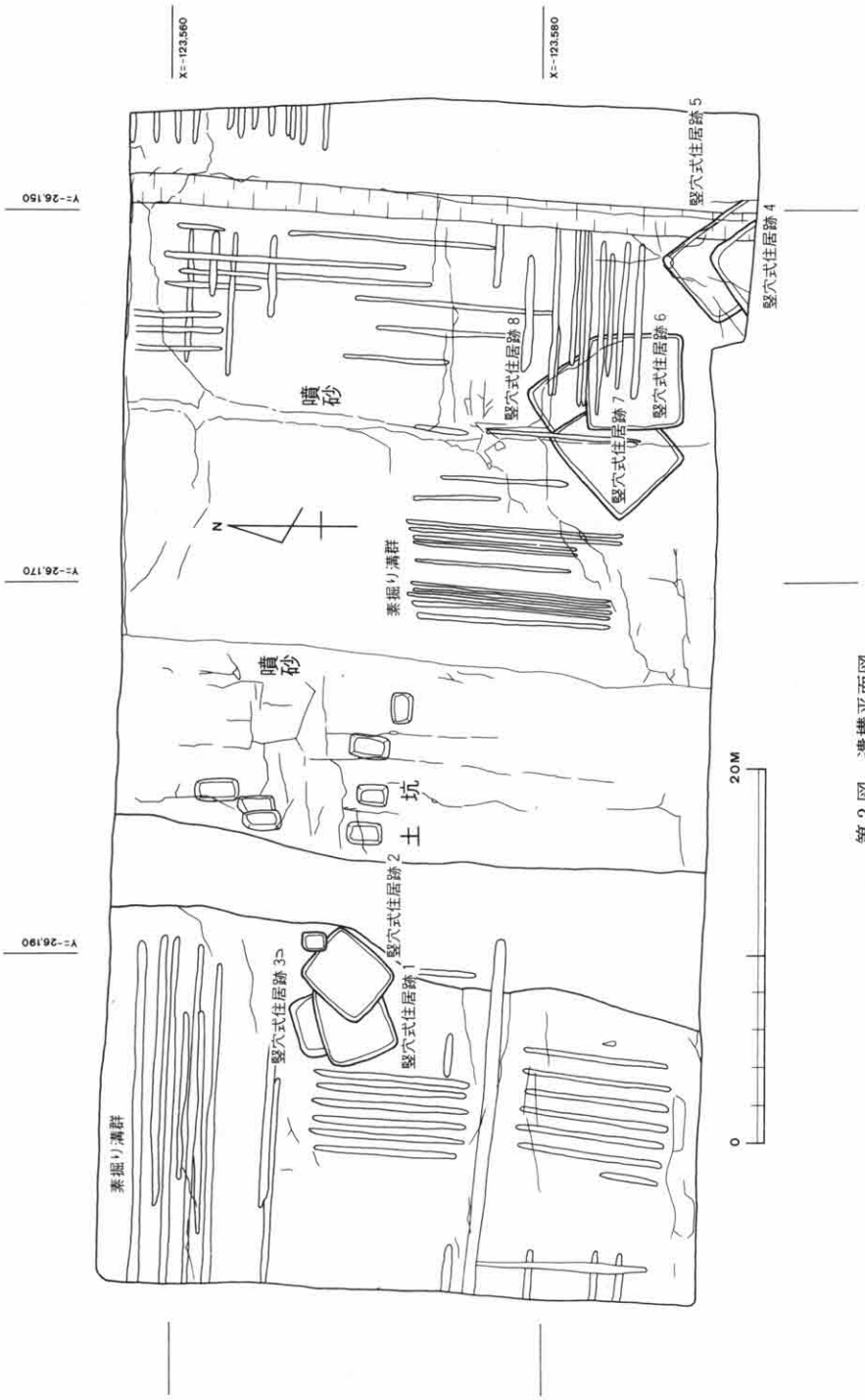
竪穴式住居跡は，計8棟を検出した。それぞれ2～3棟ずつを単位として先後関係があり，わずかな時期差が認められるが，おおむね古墳時代の初頭に属するものである。竪穴式住居跡の規模は一辺が4～5m・深さ0.2～0.3mを測り，いずれも方形を呈する。竪穴式住居跡2・4・6には焼土や炭化物が部分的に集積しており，4・6では多量の遺物が出土した。遺物としては，庄内式土器と呼ばれる土師器が多く出土した。器種は，甕，高杯，器台などがある。

土坑は，長軸2～3m・短軸0.8～1mの長方形を呈し，出土遺物は少なかったものの，古墳時代の土器片をいくらか採集した。規模や形態から土壙墓ではないかと推定される。

噴砂は，地震のときに生じるもので，下層の砂が液状になって噴き上がる現象である。今回の調査地内では，幅0.1～0.3m・立ち上がり高0.8mに及ぶ噴砂が東西・南北方向に多数確認でき，住居跡，土坑，溝にそって噴き出し，これらの遺構に大きな影響を与えている。

まとめ　竪穴式住居跡は，2～3回の建て替えが認められ，いずれも古墳時代初頭の短期間のものである。噴砂は，この調査地が震源地に近いこともあって，大規模なものである。時期は，16世紀末の「慶長の大地震」(1595年)であると考えられている。この噴砂について，その方向性が土坑，溝，住居跡などの遺構と関連している点は，興味深いものがある。

（竹井　治雄）


X=-123,560
X=-123,580
Y=-26,150
Y=-26,170
Y=-26,190
竪穴式住居跡5
竪穴式住居跡4
竪穴式住居跡8
竪穴式住居跡6
竪穴式住居跡7
噴砂
N
素掘り溝群
噴砂
土坑
竪穴式住居跡2
竪穴式住居跡1
竪穴式住居跡3
素掘り溝群
0
20M

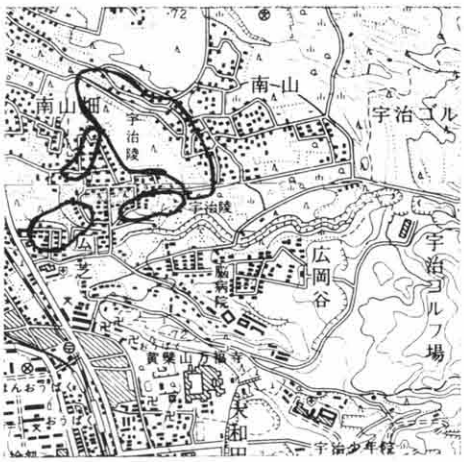
第2図　遺構平面図

府下遺跡紹介

46. 宇治陵墓群

宇治陵墓群は，宇治市木幡南山に所在する陵墓群の総称で，東西1km・南北2kmに37か所にわたって分散している。明治になってから，この墳墓群が「宇治陵墓群」と呼ばれるようになったが，ここに平安時代の藤原氏系の皇族が葬られたという伝承からこの名称が与えられた。実際は，平安時代の墳墓だけでなく，比定地内には5・6世紀の古墳も多数あることが確認されており，古くからの埋葬地として存在していたことが指摘されている。

ところで，藤原氏は，いつごろからこの木幡に氏墓を設けて葬られるようになったのであろうか。『政治要略』所引の「木幡寺鐘銘并序」によれば，「元慶太政大臣昭宣公相二地之宜一，永為二一門埋骨之処一，」とあり，藤原基経以来，藤原氏の者はこの地に葬られたことを述べている。しかし，『三代実録』仁和3(887)年5月16日条には，「是日，勅以二山城国愛宕郡鳥部郷椋原村地五町一賜二施薬院一，(中略)施薬院使等奏，院所領之山，元在二彼村一，即是藤原氏之葬地也，依二元慶八年十二月十六日詔一，被レ占二入中尾山陵之内一，由レ是氏人葬送事，既失二其便一，請二此地一，依レ旧行レ事，許レ之，」とあって，9世紀末頃には藤原氏の葬地は愛宕郡内にあったことになる。その後の『小右記』寛仁2(1018)年6月16日条には，「仁和寺例，非二一門事一，先祖占二木幡山一為二藤原氏墓所一，仍奉レ置二一門骨於彼山一，専不レ悪也，」とあって，11世紀にはすでに木幡の地に藤原氏の氏墓が存在したことが明らかである。



遺跡所在地（1/25,000）

木幡の地が基経以来，藤原氏一門の墓地と伝承されてきたのは，基経・時平と続いて二代の氏長者が宇治郡に墓所を求めたことに起因しているのであろう。『延喜式』諸陵寮には，両者とも山城国宇治郡に所在したことを伝えている。ただ，詳しい場所は指定していないので，宇治郡内のどこかは明確ではない。少なくとも，公式の記録による限り，二代続いて氏長者が宇治郡に葬られたことからすれば，基経が木幡の地

宮内庁治定宇治陵墓群被葬者

人　名	没　年	西　暦	備　　考
藤原温子	延喜7．6．8	907	宇多女御、皇太夫人、醍醐の養母
藤原穏子	天暦8．正．4	954	醍醐皇后、朱雀・村上の母
藤原安子	康保元．4．29	964	村上皇后、冷泉・円融の母
敦実親王	康保4．3．2	967	宇多皇子、胤子母
藤原懐子	天延3．4．3	975	冷泉女御、皇太后、花山の母
藤原媓子	天元2．6．3	979	円融皇后
藤原超子	天元5．正．28	982	冷泉女御、皇太后、三条の母
藤原詮子	長保3．閏12.12	1001	円融女御、皇太后、一条の母
敦道親王	寛弘4．10．2	1007	冷泉皇子、超子母
藤原遵子	寛仁元．6．1	1018	円融皇后
藤原娍子	万寿2．3．25	1025	三条皇后
藤原嬉子	万寿2．8．5	1025	後朱雀女御、皇太后、後冷泉の母
藤原姸子	万寿4．9．14	1027	三条皇后
藤原威子	長元9．9．6	1036	後一条皇后
藤原茂子	康平5．6．22	1062	後三条女御、皇太后、白河の母
藤原生子	治暦4．8．21	1067	後朱雀女御
藤原彰子	承保元．10．3	1074	一条中宮（皇后）、後一条・後朱雀の母
藤原歓子	康和4．8．17	1102	後冷泉皇后
藤原苡子	康和5．正．15	1104	堀河女御、皇太后、鳥羽の母
藤原寛子	大治2．8．14	1127	後冷泉皇后

を相伝して墓所としたとする伝承が生じてもおかしくはなかろう。

したがって，9世紀段階ではまだ木幡の地に藤原氏の墓所が成立していなかったとみた方がよさそうである。藤原氏の墓所が木幡に成立したのは，「木幡寺鐘銘」や『小右記』の記述からみて，11世紀より以前，おそらく10世紀ころとして間違いなかろう。10世紀末以降の兼家・道長・頼通・師実らの歴代氏長者は，この地に葬られるようになり，氏墓として成立した。最終的に墓所として位置づけられるのが道長の時代であることは，この時に菩提所であった浄妙寺の三昧堂が建立されたことからも明らかであろう。

ところで，明治に決定され，現在宮内庁が管理しているのは20名の墳墓にすぎない。それも，確実に誰がそこに葬られているかははっきりせず，比定の根拠は定かではない。宮

内庁決定の20名は，敦実・敦道の二親王を別にすれば，女御・皇后・中宮ばかりである。これらの人々が天皇と同所に葬られず，出身氏族の藤原氏の墓所に葬られるようになったのは，高群逸枝の研究によれば，氏族墓が成立していたからで，当時の家族のありようと関係するということである。ただ，高群説が成立するには，藤原氏の氏族としての特質や，他の氏族での墓所と婚家先の墓所の関係がはっきりする必要がある。現時点では，女御・皇后・中宮が出身氏族の藤原氏の墓所に帰葬された事実しかわからない。

なお，木幡の地には，氏長者や皇族関係の人だけでなく，その他の一門の墓所も存在したはずで，さきに述べた基経や時平もこの地に葬られた可能性もある。現在，宮内庁が管理しているものには，墳墓が90基ほどある地域を囲って一つの陵墓としたり，5世紀や6世紀頃の古墳(円墳・前方後円墳もある)を陵墓に比定したものもあり，確実な被葬者のわかるものではない。ただ，この地が藤原氏だけの墓所ではなく，古墳時代から一貫して墳墓が築かれるような地であったことは注目すべき事実である。

この宇治陵墓群に藤原氏関係の人が葬られなくなるのは，12世紀中葉以降である。このころになると，藤原氏の内でも，摂政・関白となる家系がそれぞれ，近衛・九条・鷹司・一条・二条の5家(五摂家)に分かれ，その菩提所も五摂家ごとに成立するようになったので，氏族全体の墓所そのものが次第にかえりみられることがなくなってきたのである。同時に菩提所として近くにあったと推定される木幡寺(浄妙寺)も衰微した。九条兼実の『玉葉』の建久3(1192)年正月20日条に，「但彼寺，藤氏一門安置其骨，法成寺入道相国，殊有起請之状，仍寺務之仁，又大旨為一族之人歟，粗他人雖相交，皆是長者之最也，今法親王御知行，道理不相応，事又無便宜，抑又将来違乱之本歟。」とあって，木幡寺の寺務が藤原氏の氏人から皇族の法親王へ移ったことを嘆いている。これ以後，浄妙寺は，一層衰微していき，北家全体で一つという墓所もなくなっていくのである。

なお，宇治陵墓群に関しては，1977年に6日間ではあったが，発掘調査が実施された。調査地は，現宇治陵7号陵・8号陵の隣接地で，宇治市教育委員会が主体となって調査が行われた。「陵墓」の隣接地であるため，陵墓に関係するような古墳の遺構や平安時代墳墓関連の遺構検出が期待されたが，この時の調査では遺構・遺物はまったく検出されず，宇治陵墓群の考古学的な評価は今後に残されることになった。　　(土橋　誠)

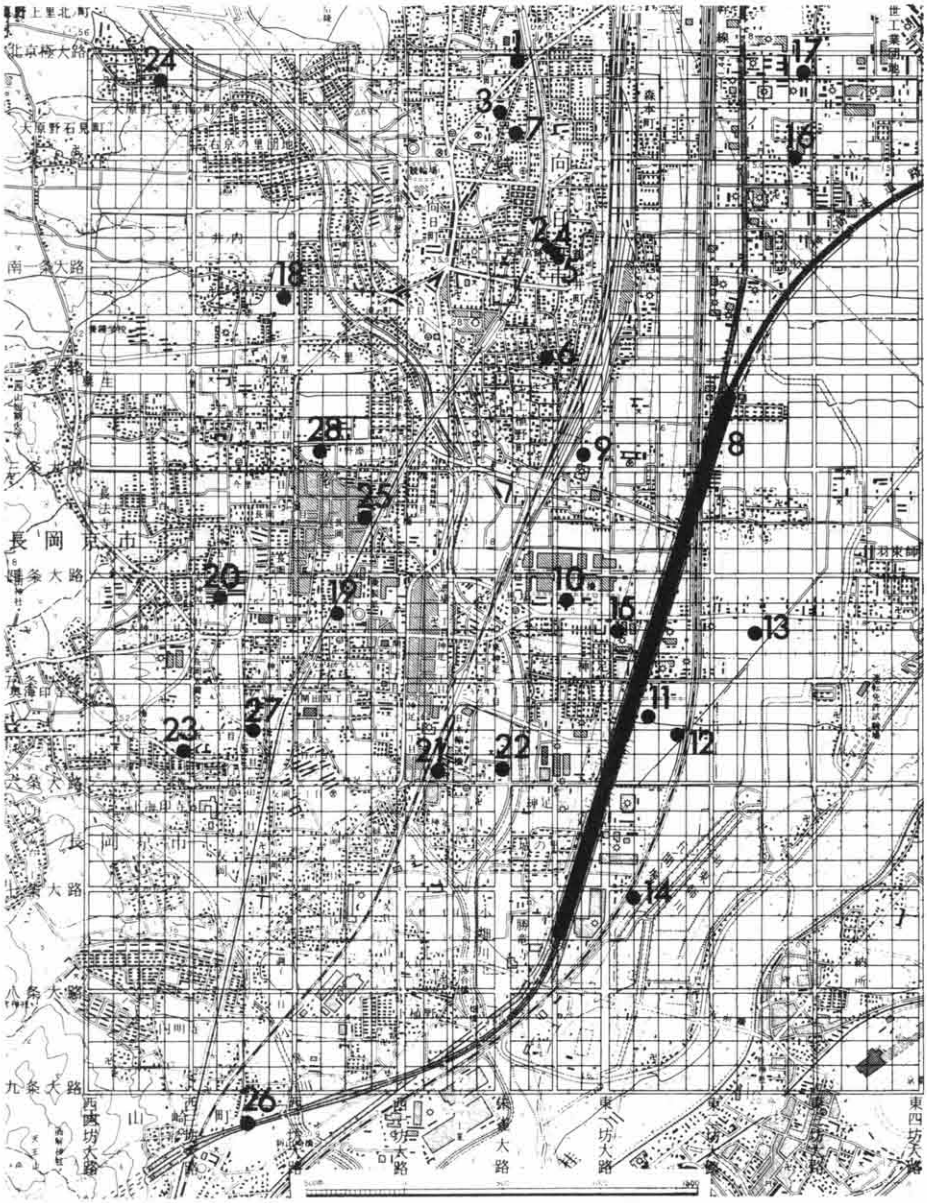
〈参考文献〉
高群逸枝『招婿婚の研究』
高群逸枝『日本婚姻史』
『宇治市史』1—古代の歴史と景観—1973年
『日本考古学年報』30(1977年度版)1979年
『京都府の地名』平凡社　1981年

長岡京跡調査だより・32

平成元年11月22日・12月20日・同２年１月24日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は，宮域７件，左京域10件，右京域11件の計28件であった。これら28件の調査地は，位置図・一覧表のとおりである。このうち，主なものいくつかについて，調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表　（1990年１月末現在）

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内231次	7AN6M	向日市寺戸町初田25	(財)向日市埋文	8/7～11/15
2	宮内232次	7AN9T	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	11/6～11/27
3	宮内233次	7AN11O	向日市寺戸町殿長22，22-5	(財)向日市埋文	10/4～11/2
4	宮内234次	7AN9U	向日市鶏冠井町御屋敷27-5	(財)向日市埋文	10/30～11/30
5	宮内235次	7AN9V	向日市鶏冠井町御屋敷27-1	(財)向日市埋文	11/25～
6	宮内236次	7AN10N-2	向日市上植野町浄徳11-40他	(財)向日市埋文	1/9～
7	宮内237次	7AN7L	向日市寺戸町東野辺58	(財)向日市埋文	1/16～
8	左京216次	7ANMTD-2他	長岡京市勝竜寺他	(財)京都府埋文	4/4～
9	左京226次	7ANFKS	向日市上植野町車返8-10	(財)京都府埋文	7/28～
10	左京228次	7ANLID-2	長岡京市馬場井料田10	(財)長岡京市埋文	8/28～12/15
11	左京229次	7ANMTD-3	長岡京市神足寺田１	(財)長岡京市埋文	9/4～11/15
12	左京230次	7ANMJN	長岡京市神足拾弐19-1	(財)長岡京市埋文	9/18～11/7
13	左京233次	7ANXOK-2	京都市伏見区羽束師古川町	(財)京都市埋文	10/2～12/15
14	左京234次	7ANQOR	長岡京市勝竜寺長黒地内	(財)長岡京市埋文	11/29～12/4
15	左京235次	7ANLRB-2	長岡京市馬場六ノ坪1-4	(財)長岡京市埋文	1/8～
16	左京236次	7ANVHR	京都市南区東土川町・西羽束師川	(財)京都市埋文	12/25～
17	左京237次	7ANVUC-2	京都市南区久世大薮町	(財)京都市埋文	1/5～
18	右京335次	7ANIFC 7ANGSU	長岡京市今里更ノ町・井ノ内下印田	(財)京都府埋文	8/4～
19	右京336次	7ANKKN	長岡京市開田一丁目149-4他	(財)長岡京市埋文	9/20～10/2
20	右京337次	7ANIUS-3	長岡京市天神四丁目５	(財)長岡京市埋文	10/4～12/18
21	右京338次	7ANMNM	長岡京市神足二丁目331他	(財)長岡京市埋文	10/16～12/16
22	右京339次	7ANMKI-2	長岡京市東神足二丁目15-2	(財)長岡京市埋文	10/24～
23	右京340次	7ANKTM-2	長岡京市天神二丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/8～12/7
24	右京341次	7ANUDD	京都市西京区大原野上里北ノ町	(財)京都市埋文	11/15～12/14
25	右京342次	7ANKMN-2	長岡京市長岡一丁目207-3他	(財)長岡京市埋文	12/11～1/11
26	右京343次	7ANSIR 7ANSDD-3	大山崎町円明寺井尻・百々	(財)京都府埋文	1/8～
27	右京344次	7ANKJC	長岡京市天神一丁目610-2	(財)長岡京市埋文	1/8～
28	右京345次	7ANIFD-7	長岡京市野添二丁目108-1	(財)長岡京市埋文	1/22～



▽番号は一覧表・本文（　）内と対応

調査地位置図

宮内第233次（3）

（財）向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙および森本遺跡・岸ノ下遺跡の調査である。弥生・古墳時代の遺物，長岡京期・平安時代・中世の遺構・遺物が検出された。

長岡京期の遺構は，掘立柱建物1棟・築地塀がある。掘立柱建物は二面廂をもつ南北棟建物であり，その西側にある築地塀は官衙の西を限るものとみられる。

現「西国街道」の西側で検出された溝は，平安時代の西国街道の西側溝とみられる。

宮内第234次（4）

（財）向日市埋蔵文化財センター

内裏北辺築地回廊および内裏下層遺跡の調査である。弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居・土坑や内裏北側の築地回廊などが検出された。築地回廊の南北両雨落溝の心々距離は14mである。

宮内第235次（5）

（財）向日市埋蔵文化財センター

内裏北西域および内裏下層遺跡の調査である。古墳時代後期の溝，長岡京期の掘立柱建物1棟などが検出された。掘立柱建物の全容は不明であるが，柱間3mを測る大規模建物である。

左京第228次（10）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

左京五条一坊九・十町および馬場遺跡の調査である。縄文～古墳時代・長岡京期・中世の遺構・遺物が検出された。

長岡京期の遺構は，東一坊坊間大路の東側溝・五条第一小路の両側溝・掘立柱建物1棟・柵などがある。建物・柵は，九町の宅地の西南隅にあり，その北側は空閑地である。

下層で検出された方形周溝墓3基は，庄内式～布留式の土器を伴う。

右京第336次（19）

（財）長岡京市埋蔵文化財センター

右京五条二坊十町の調査である。長岡京期の掘立柱建物2棟・土坑，中世の溝などが検出されたが，建物の規模は不明である。

（平良　泰久）

センターの動向（元.11～2.1）

1．できごと

11．7　上田　將京都府教育庁指導部長，上人ヶ平遺跡（木津町）発掘調査現地視察

7～8　樋口隆康副理事長，遠所遺跡群（弥栄町）等の発掘調査現地視察

9　興戸遺跡（田辺町）発掘調査開始

9～10　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（東京都）出席（荒木事務局長・今村主事・林主事）

11　長岡宮大極殿祭出席（山本次長）

13　上田正昭理事，上人ヶ平遺跡発掘調査現地視察

井前遺跡・桜内遺跡（加悦町）試掘調査開始

15　両丹文化財保護連絡協議会（綾部市）出席（中谷次長）

15～16　全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等導入研究委員会（広島市）出席（杉原調査第2課長・土橋調査員）

16　藤井　学理事，上人ヶ平遺跡発掘調査現地視察

17　中京納税協会一行来所

20　藤田价浩理事，上人ヶ平遺跡発掘調査現地視察

中海道遺跡（向日市）発掘調査開始

21　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議（大阪市）出席（安田総務係長・杉江主事・今村主事）

21～22　田中　琢奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長，遠所遺跡群等発掘調査現地指導

22　長岡京連絡協議会開催

長岡京跡左京第226次（向日市）発掘調査終了（7.25～）

27　瀬後谷遺跡（木津町）発掘調査終了（8.5～）

28～29　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（宮津市）出席（杉原調査第2課長・田代調査員）

29　中国陝西省文物保護視察団（陳全方団長）来所

阿婆田窯跡群（大宮町）発掘調査現地説明会実施

コクバラノ遺跡（久美浜町）発掘調査終了（10.4～）

12．1　第26回理事会開催―於・平安会館―福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，荒木昭太郎常務理事，中沢圭二・川上　貢・藤井　学・足利健亮・都出比呂志・藤田价浩・堤圭三郎の各理事出席

2　第54回研修会開催―別掲―

5　都出比呂志理事，上人ヶ平遺跡発掘調査現地視察

5～6　重要考古資料選定会議（主催・文化庁，大阪市）出席（杉原調査第2課長・辻本調査第1係長）

7　10周年記念特別展覧会企画委員会開催

8　天若遺跡(日吉町)試掘調査開始

11　八木嶋遺跡(八木町)発掘調査開始

12　足利健亮理事，千代川遺跡(亀岡市)発掘調査現地視察

仏南寺城跡(綾部市)発掘調査開始

13　高田山古墳群(福知山市)発掘調査現地説明会実施

14　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(奈良市)出席(山本次長・安田総務係長・木村主事)

16～17　職員親睦会旅行(赤穂御崎温泉)

20　長岡京連絡協議会開催

28　仕事納め

2.1.4　仕事初め

10　小谷遺跡・小谷古墳(八木町)発掘調査開始

12　高田山古墳群発掘調査終了(10.18～)

23　都出比呂志理事，中海道遺跡発掘調査現地視察

24　長岡京連絡協議会開催

26　桑飼上遺跡(舞鶴市)発掘調査関係者説明会実施

30　中海道遺跡発掘調査関係者説明会実施

2．普及啓発事業

12．2　第54回研修会開催(於・京都府京都文化博物館)―最近の古墳の発掘調査―伊野近富「丹波町塩谷古墳群の発掘調査・巫女形埴輪を中心に」，佐藤晃一「史跡作山古墳の発掘調査」，福永伸哉「滋賀県八日市市雪野山古墳の調査」

受贈図書一覧（元.12～2.1）

苫小牧市埋蔵文化財センター	苫小牧市静川37遺跡発掘調査(第1次)概要報告書，とまこまい埋文だより No.18
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.46
(財)栃木県文化振興事業団	栃木県文化振興事業団年報―昭和62年度―，同―昭和63年度―，栃木県埋蔵文化財調査報告書 第95・97・103～104集，新四号国道と遺跡
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第91・95～96集
(財)千葉県文化財センター	房総考古学ライブラリー4～弥生時代～，千葉県文化財センター年報 No.13～14，研究連絡誌 第23～24号，千葉県文化財センター調査報告書 第152～169集
(財)印旛郡市文化財センター	昭和62年度 (財)印旛郡市文化財センター年報 4，(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第15・17・19～21・23～25・27集
(財)君津郡市文化財センター	君津郡市文化財センター年報 No.6～7，蔵玉砦跡，三箇遺跡群Ⅴ～Ⅵ，(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第12・21・40～43集
東京都埋蔵文化財センター	資料目録 3，東京都埋蔵文化財センター年報 9，東京都埋蔵文化財センター調査報告 第10集
富山県埋蔵文化財センター	平成元年度特別企画展図録「鉄―人とのかかわりと移り変わり―」，埋文とやま 第29号
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県埋蔵文化財調査報告 第4集
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 7～8
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.19
(財)滋賀県文化財保護協会	服部遺跡発掘調査報告 Ⅲ，長浜新川中小河川改修工事に伴う鴨田遺跡発掘調査報告書 Ⅰ，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XⅦ-3，文化財教室シリーズ 106～109，滋賀文化財だより 139～140
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第115～117号
(財)大阪市文化財協会	葦火 23号
(財)東大阪市文化財協会	(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度
(財)枚方市文化財研究調査会	ひらかた文化財だより 創刊号，枚方文化財年報 Ⅸ
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所学報 第47冊，奈良国立文化財研究所年報 1988
奈良県立橿原考古学研究所	斑鳩藤ノ木古墳概報―第1次調査～第3次調査―，平城京左京四

	条二坊一坪，奈良県遺跡調査概報 1985年度(第1分冊)，同(第2分冊)，奈良県遺跡調査概報 1986年度(第1分冊)，同(第2分冊)，奈良県文化財調査報告書 第48・50集，奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第50・52冊
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	年報Ⅳ 昭和62年度，賀茂学園都市開発整備事業地(西高屋地区)内遺跡群 Ⅳ，広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第74～82集，ひろしまの遺跡 第38～39号
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.196～199
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第8号
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書 第26集
群馬県教育委員会	西田島遺跡 Ⅱ
箕郷町教育委員会	生原・善龍寺前遺跡，海行A・B遺跡
府中市教育委員会	武蔵国府の調査 XⅧ
富来町教育委員会	鹿頭上の出遺跡
多治見市教育委員会	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第21～22号
関町教育委員会	関町埋蔵文化財調査報告 Ⅵ～Ⅷ
大津市教育委員会博物館建設室	博物館だより　創刊号
山東町教育委員会	山東町埋蔵文化財調査報告書 Ⅳ
新旭町教育委員会郷土資料室	郷土資料室だより 第4号
大阪市教育委員会	昭和62年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書，大阪市の文化財 改訂第6版
泉南市教育委員会	大阪湾と巨大古墳
高石市教育委員会	高石市史 第1巻(本文編)
藤井寺市教育委員会	藤井寺市文化財報告 第5集，藤井寺の遺跡ガイドブック No.4
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 Ⅶ～Ⅸ
新宮町教育委員会	広域水田遺跡調査報告書 Ⅰ，新宮町古文書目録集 第5集，新宮町歴史民俗資料館開館十周年記念特別展示図録「遺物が語る新宮の歴史」
八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ 第1～2・8集
岡山市教育委員会	大廻小廻山城跡発掘調査報告
久留米市教育委員会	久留米市文化財調査報告書 第56・58～60集
太宰府市教育委員会	太宰府市の文化財 第12～14集
佐賀市教育委員会	収蔵品目録 第1集，佐賀市文化財調査報告書 第23～26集
熊本市教育委員会	乾原・迎八反田遺跡群(Ⅰ)調査報告書
竹田市教育委員会	池部朝鍋遺跡，昭和63年度 史跡岡城跡保存整備事業報告書，昭和63年度 岡藩銭座跡発掘調査事業報告書，昭和63年度 竹田地区

	遺跡群発掘調査報告書
鹿児島県教育委員会	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)
八戸市博物館	博物館だより No.12
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第14号
秋田県立博物館	博物館ニュース No.78～79
土浦市立博物館	第3回特別展示図録 常陸の埴輪―埴輪が語る古墳時代の常陸―
国立歴史民俗博物館	歴博 第38号
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘だより 第18号
市立市川考古博物館	昭和62年度 市立市川考古博物館年報，市立市川考古博物館図録16，考古・歴史博物館ニュースほりのうち No.12
流山市立博物館	流山市立博物館年報 No.11
下総史料館	かみしき 31
世田谷区立郷土資料館	世田谷の地名(下)，企画展「カメラの歴史と世田谷の風景」図録，特別展「玉電」―玉川電気鉄道と世田谷のあゆみ―，資料館だより No.11
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.70
福井県立博物館	福井県立博物館紀要 第3号，第11回特別展 石をめぐる歴史と文化―笏谷石とその周辺―，ふくいミュージアム No.16
山梨県立考古博物館	第7回特別展 一粒の籾―弥生農耕の風景―，山梨県立考古博物館だより No.19
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 88
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	くらしの中の木～木製品にみる弥生人の心～
名古屋市見晴台考古資料館	年報 Ⅵ，菩薩遺跡発掘調査概要報告書，貴生町遺跡発掘調査概要報告書，熱田神宮内遺跡発掘調査概要報告書，NN-259号窯跡発掘調査報告書，伊勢山中学校遺跡第4次調査概報，茶臼山古墳発掘調査の概要，古渡城跡発掘調査の概要，若葉通遺跡発掘調査の概要，堅三蔵通遺跡第8・9次調査の概要，名古屋城三の丸遺跡1・2・3次調査の概要，ドンドン塚発掘調査の記録
蒲郡市博物館	蒲郡市制35周年記念・博物館開館10周年記念特別展「沖縄・浦添の文化財」
常滑市民俗資料館	図録 常滑窯への胎動・室町の壺展
豊田市郷土資料館	旧井上家西洋館移築復元工事報告書
斎宮歴史博物館	斎宮跡発掘資料選，斎宮歴史博物館だより No.1～2
滋賀県立近江風土記の丘資料館	常設展図録，中世の信楽―その実像と編年を探る―
彦根城博物館	彦根城博物館だより 7
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第66～67号

堺市博物館	堺市制100周年記念特別展「堺衆―茶の湯を創った人びと―」
八尾市立歴史民俗資料館	八尾市立歴史民俗資料館研究紀要 創刊号，八尾市立歴史民俗資料館館報(昭和62・63年度創刊号)
兵庫県立歴史博物館	わたりやぐら 第14号，歴博ニュース No.29
神戸市立博物館	博物館だより No.30
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館ニュース 第6号
龍野市立歴史文化資料館	常設展示図録，龍野市立歴史文化資料館開館記念「揖保川流域の古代首長たち」
春日町歴史民俗資料館	特別展「黒井城と春日局」
鳥取県立博物館	郷土と博物館 68～69号
島根県立八雲立つ風土記の丘	古代の出雲と北陸，八雲立つ風土記の丘 No.98～99
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 創刊号
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 36
長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館だより No.104
東京大学総合研究資料館	東京大学総合研究資料館ニュース 17号
日本大学史学会	史叢　第43号
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館館報 No.5
早稲田大学	早稲田大学東伏見総合グラウンド遺跡A地区埋蔵文化財試掘調査報告書
早稲田大学考古学会	古代　第88号
早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室	早大所沢文化財調査室月報 No.51～54
滋賀大学教育学部	条里縁辺地域における水利・土地利用システムの歴史地理学研究
天理大学附属天理参考館	天理参考館報 第2号
奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会	奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報 Ⅳ
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報 Ⅶ
文化庁	昭和62年度実施報告 都市周辺の軽石堆積地における遺跡保存方法の検討，昭和63年度実施報告 遺跡保存方法の検討―沖積低地の遺跡―
板橋区徳丸森木遺跡調査会	徳丸森木遺跡
東北新幹線赤羽地区遺跡調査会	赤羽台遺跡―赤羽台横穴墓群―
本郷遺跡調査団	海老名本郷 Ⅶ
国立国会図書館	日本全国書誌 No.1,725
朝日新聞社	アサヒグラフ 3,522号
(株)講談社	古代史復元 9(古代の都と村)

中央公論社	図説日本の古代 第3巻
(株)ジャパン通信社	月刊文化財発掘出土情報 第84号
(株)名著出版	歴史手帖 第194～196号
(財)古代學協會	土車 第52号，古代文化 第370～372号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第31号
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要 Ⅷ
遊戯史学会	遊戯史研究　創刊号
(財)由良大和古代文化研究協会	研究紀要 第1集
朝鮮学会	朝鮮学報 第132輯
木簡学会	木簡研究 第11号
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード　Museum Kyushu 第31号
(財)向日市埋蔵文化財センター	昭和63年度 (財)向日市埋蔵文化財センター年報 Ⅰ，向日市埋蔵文化財調査報告書 第26～27集
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和62年度，長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第4集
京都府教育委員会	京都府指定・登録文化財等目録
岩滝町教育委員会	京都府岩滝町文化財調査報告 第9集
福知山市教育委員会	福知山市文化財調査報告書 第16集
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第22冊
加茂町	加茂町史編さんだより紫陽花 第7号
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 第7号，特別展示 展示図録9 四季の古文書—古文書に探る村のくらし—
京都府立総合資料館	総合資料館だより No.82
(財)京都府文化財保護基金	文化財報 No.67
京都市歴史資料館	昭和63年度 京都市歴史資料館年報 No.7
京都市考古資料館	「桃山時代の京都」 特別展図録
京都教育大学考古学研究会	史想 第22号(小江慶雄先生追悼号)
花園大学考古学研究室	花園大学構内調査報告 Ⅲ
立命館大学文学部学芸員課程	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第2冊
京都橘女子大学	京都橘女子大学研究紀要 第16号
石川　昇	前方後円墳築造の研究
伊野近富	中近世土器の基礎研究 Ⅳ～Ⅴ
井上正暉	史談ふくち山 第437～450号
岡本正太郎	古代文化を考える 第20号
潮見　浩	大迫山第1号古墳発掘調査概報
高橋美久二	古代史復元 9(古代の都と村)
原田享二	佐原市内遺跡群発掘調査概報 Ⅱ，小見川町文化財報告 第15集

—編集後記—

3月になり，ようやく春らしくなってまいりましたが，情報35号が完成しましたのでお届けします。

本号では，平成元年度に調査した遺跡のうち，塩谷5号墳と高田山古墳群について速報を掲載しました。そのうち，塩谷5号墳では巫女形埴輪が出土して話題になりましたので，人物埴輪を中心とした内容になっています。また，投稿原稿もあり，弥生時代中期の生駒西麓産土器についての内容で，力作となっています。よろしく，御味読下さい。

（編集後記＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第35号

平成2年3月26日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
℡（075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡（075)441-3155（代）